

現代の日展作家たち — 日本の美

2022

NITTEN Artists Today: The Beauty of Japan



奥田小由女「終熄への祈り」2021年

はじめに — 個性がぶつかりあって光り輝く日展を

奥田小由女前理事長による公益社団法人日展の大改革から九年目を迎え、このたび新理事長を仰せつかりました。日展は、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五部門からなり、毎年全国から一万点を超すご応募をいただき、入選者と会員などを合わせて約三千点の新作を国立新美術館の会場に展示しております。

作家が一年間の思いをかけて制作した作品の展示。そこには良い意味での競い合い、輝き合いが出ています。光の三原色は最後に透明になって光り輝きます。一つ一つの作品という「光」がぶつかり合って、より明るく、より透明な輝きのある日展になったら嬉しく思います。井上ひさしさんの言葉で「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく……」というものがあるのですが、私は真ん中を取って「難しいことは面白くやれば良い」と考えております。展覧会は作った作品を発表するだけではなく、鑑賞者との距離感をもっと縮めて、共に楽しむ場、感動を共有する場としたい。たとえば冬の極寒の世界を表現した作品があるとすれば、それを見て何か冬の

厳しさやワールドスポーツを体感できる。私の作品なら、皆で楽しんでイルカと一緒に泳ぐ気持ちになっただけなら嬉しいと思います。

作家は一年をかけて作品を作ります。そこにはドキドキや喜怒哀楽、目的に向かう葛藤があります。作品を見ることで、その一年間の葛藤を瞬時に共有できる。「面白い日展、明るい日展、楽しい日展、みんなの日展」というようにどんどん広がって行って皆で楽しみたいと思っております。

そして五科あるわけですから、作家の様々な作品を通して鑑賞者が同じフィールドにいられるような環境を作れたらと思います。日展は面白いものを発見する場所、生きたステージ、舞台です。そこで人間模様が展開されていきます。一一五年という長い歴史を振り返り、日展という土壌があったからこそ、毎回厳しく立ち向かい切磋琢磨して数々の作品ができあがってきました。日展が皆様にとっても夢のある楽しい世界であっていただきたい。ぜひ多くの皆様にご高覧いただき、今後も皆様のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



「悠々快泳」2017年 東京メトロ 末広町駅にて

公益社団法人日展 理事長

宮田 亮平



もくじ

日展の顧問・理事・監事・会員紹介

インタビュ

工芸美術

宮田 亮平

数値で測れない芸術の歓び

16

日本画

村居 正之

群青の岩絵の具とともに

20

洋画

小灘 一紀

『古事記』を紐解き日本人の心を油絵で

24

彫刻

山田 朝彦

有由有縁

28

工芸美術

伊藤 裕司

日本の古典を「色漆」で表現

32

書

土橋 靖子

漢字とかなの調和をテーマに

36

日本画

伊東 正次

日本画から大和絵へ

40

洋画

本山 二郎

時間と感動を絵の中に

44

彫刻

森田 一成

不屈の精神と斬新な発想で

48

工芸美術

田中 照一

色金の組み合わせを強みに

52

書

歳森 芳樹

一つの線にかける気概

56

日展開催概要と会期中のイベント

60



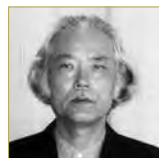
洋画 副理事長
さとう てつ
佐藤 哲

1944年、大分県生まれ。江藤哲に師事。1966年、大分大学学芸学部美術科卒業。1975年、第7回日展初入選。1982年、第14回日展「紫陽花の頃」により特選受賞。1993年、第25回日展「黒衣」により特選受賞。2009年、第41回日展「ひととき」により文部科学大臣賞受賞。2013年、第44回日展出品作「夏の終りに」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、東光会理事長。



洋画 理事
ゆやま としひさ
湯山 俊久

1955年、静岡県生まれ。坪内正、伊藤清永、中山忠彦に師事。1980年、多摩美術大学油画科卒業。1983年、第15回日展初入選。1990年、第22回日展「悠想」により特選受賞。1998年、第30回日展「想春」により特選受賞。2004年、第36回日展「爽秋」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「L'allure (ラリュール)」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組新第3回日展出品作「l'Aube (夜明け)」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



洋画 理事
こなだ いっき
小灘 一紀

1944年、鳥取県生まれ。芝田米三、大島士一に師事。1967年、金沢美術工芸大学卒業。1973年、第5回日展初入選。1992年、第24回日展「窓辺」により特選受賞。1995年、第27回日展「横たわる」により特選受賞。2002年、第34回日展「めざめ」により日展会員賞受賞。2017年、改組新第4回日展「伊須気余理比売」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、日洋会理事長。



洋画 理事
さいとう ひでお
斎藤 秀夫

1943年、福島県生まれ。伊藤清永に師事。1966年、中央大学卒業。1978年、第10回日展初入選。1991年、第23回日展「午後のひととき」により特選受賞。1993年、第25回日展「ショールの婦人」により特選受賞。2019年、改組新第6回日展「清新」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事。



日本画 理事
わたなべ のぶよし
渡辺 信喜

1941年、京都府生まれ。山口華楊に師事。1964年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)日本画科卒業。同年、第7回日展初入選。1971年、第3回日展「林檎」により特選受賞。1984年、第16回日展「林檎」により特選受賞。2015年、改組新第2回日展「夏草」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、京都精華大学名誉教授。



洋画 顧問
なかやま ただひこ
中山 忠彦

1935年、福岡県生まれ。伊藤清永に師事。1954年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「椅子に倚る」により特選受賞。1981年、第13回日展「縞衣」により特選受賞。1990年、第22回日展「青衣」により日展会員賞受賞。1996年、第28回日展「華粧」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「黒扇」により日本芸術院賞受賞。2001年、日展事務局長。2009年、日展理事長。2019年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、白日会会長。



洋画 顧問
てらさか たかお
寺坂 公雄

1933年、広島県生まれ。1956年、愛媛大学教育学部美術科卒業。1954年、第10回日展初入選。1962年、第5回日展「カニのある静物」により特選受賞。1986年、第18回日展「レリーフのある棚」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展「デルフォイへの道」により文部科学大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「アクロポリスへの道」により日本芸術院賞受賞。2009年、日展事務局長。2013年、日展理事長。2020年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、山梨大学名誉教授。



洋画 顧問
ふじもり かねあき
藤森 兼明

1935年、富山県生まれ。高光一也に師事。1958年、金沢美術工芸大学油絵科卒業。1956年、第12回日展初入選。1980年、第12回日展「画室にて」により特選受賞。1984年、第16回日展「僧院の午後」により特選受賞。2001年、第33回日展「アドレージョパンタナサ」により日展会員賞受賞。2004年、第36回日展「アドレージョ・デミトリオス」により内閣総理大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「アドレージョサンビターレ」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員、光風会理事長。



日本画 副理事長
つちや れいいち
土屋 禮一

1946年、岐阜県生まれ。加藤東一に師事。1967年、武蔵野美術大学実技専修科日本画卒業。同年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「水たまり」により特選・白寿賞受賞。1976年、第8回日展「暮れて行く」により特選受賞。1985年、第17回日展「隠岐」により日展会員賞受賞。2005年、第37回日展「椿樹」により文部科学大臣賞受賞。2007年、第38回日展出品作「軍鶏」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、金沢美術工芸大学名誉教授。



日本画 理事
ふくだ せんけい
福田 千恵

1946年、東京都生まれ。佐藤太清に師事。1969年、武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業。同年、改組第1回日展初入選。1981年、第13回日展「紫陽花とテレサ」により特選受賞。1984年、第16回日展「単衣の女」により特選受賞。1996年、第28回日展「刀匠」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「ながい夜」により文部大臣賞受賞。2006年、第37回日展出品作「ピアニスト」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



日本画 理事
やまざき たかお
山崎 隆夫

1940年、新潟県生まれ。下保昭に師事。1967年、京都教育大学特修美術日本画専攻科卒業。1965年、第8回日展初入選。1972年、第4回日展「森」により特選受賞。1973年、第5回日展「トマト」により無鑑査・特選受賞。1992年、第24回日展「海游」により日展会員賞受賞。2008年、第40回日展「沼宴」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「海煌」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



日本画 理事
むらい まさゆき
村居 正之

1947年、京都府生まれ。池田遙邨に師事。1968年、画塾・青塔社へ入会。1971年、第3回日展初入選。1975年、第7回日展「赤い陸橋」により特選受賞。1990年、第22回日展「サンマルタン運河」により特選受賞。2018年、改組新第5回日展「暮れゆく時」により文部科学大臣賞受賞。2020年、改組新第3回日展出品作「日照」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、大阪芸術大学教授。紺綬褒章受章。

日展の顧問・理事・監事紹介

(2022年8月25日現在)



工芸美術 顧問
おおひ としろう
大樋 年朗

1927年、石川県生まれ。1949年、東京美術学校(現・東京藝術大学)工芸科卒業。1950年、第6回日展初入選。1956年、第12回日展『『風寒し』青釉花器』により北斗賞受賞。1957年、第13回日展『『鶏』緑釉壺』により特選・北斗賞受賞。1961年、第4回日展「釉彩『魚紋』花器』により特選・北斗賞受賞。1982年、第14回日展『『歩いた道』花器』により文部大臣賞受賞。1985年、第16回日展出品作『『峙つ』花三島飾壺』により日本芸術院賞受賞。2004年、文化功労者。2008年、金沢学院大学副学長。2011年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



工芸美術 顧問
いまい まさゆき
今井 政之

1930年、大阪府生まれ。楠部彌弼に師事。1957年、広島県立竹原工業学校金属工芸科卒業。1953年、第9回日展初入選。1959年、第2回日展『焼べ『盤』』により特選・北斗賞受賞。1963年、第6回日展『『泥彩』壺』により特選・北斗賞受賞。1998年、『赫窯 雙蟹』により日本芸術院賞受賞。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。2018年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



工芸美術 顧問
なかい ていじ
中井 貞次

1932年、京都府生まれ。1954年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)工芸科卒業。1956年、同大学専攻科修了。1953年、第9回日展初入選。1969年、改組第1回日展『集積』により特選・北斗賞受賞。1977年、第9回日展『間の實在』により特選受賞。1990年、第22回日展『巨木積雪』により文部大臣賞受賞。1993年、第23回日展出品作『原生雨林』により日本芸術院賞受賞。2017年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



工芸美術 顧問
もりの たいけい
森野 泰明

1934年、京都府生まれ。1958年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)卒業。1960年、同大学専攻科修了。1957年、第13回日展初入選。1960年、第3回日展『青釉花器』により特選・北斗賞受賞。1966年、第9回日展『花器『藍』』により特選・北斗賞受賞。2007年、第38回日展出品作『扁壺『大地』』により日本芸術院賞受賞。2019年、旭日中綬章受章。2021年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



彫刻 理事
やまだ ともひこ
山田 朝彦

1943年、広島県生まれ。1966年、明治大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1987年、第19回日展「雄」により特選受賞。1990年、第22回日展「若人」により特選受賞。2012年、第44回日展「こもれび」により文部科学大臣賞受賞。2016年、改組 新第2回日展出品作「朝の響き」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、日本彫刻会理事長。



彫刻 理事
みやせ とみゆき
宮瀬 富之

1941年、京都府生まれ。松田尚之に師事。1968年、金沢美術工芸大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1973年、第5回日展『風よそおい』により特選受賞。1974年、第6回日展『風の中を』により無鑑査・特選受賞。2005年、第37回日展『はんなりと石庭に』により内閣総理大臣賞受賞。2009年、第40回日展出品作『源氏物語絵巻に想う』により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



彫刻 監事
いけがわ すなお
池川 直

1958年、香川県生まれ。1983年、筑波大学大学院芸術研究科修了。同年、第15回日展初入選。1994年、第26回日展『道』により特選受賞。1996年、第28回日展『もう一人の私』により特選受賞。2017年、改組 新第4回日展『エトルスク 古代の記憶』により文部科学大臣賞受賞。2019年、改組 新第5回日展出品作『時の旅人』により日本芸術院賞受賞。現在、日展監事、鹿児島大学教育学部教授。



工芸美術 顧問
おくだ きよこ
奥田 小由女

1936年、大阪府生まれ。1967年、第10回日展初入選。1972年、第4回日展『或るページ』により特選受賞。1974年、第6回日展『風』により特選受賞。1988年、第20回日展『海の詩』により文部大臣賞受賞。1990年、第21回日展出品作『炎心』により日本芸術院賞受賞。2006年、奥田元宋・小由女美術館開館。2008年、文化功労者。2013年、日展事務局長。2014年、日展理事長。2020年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、現代工芸美術家協会理事長。



彫刻 顧問
ひる た じろう
蛭田 二郎

1933年、茨城県生まれ。小森邦夫に師事。1958年、茨城大学教育学部卒業。1965年、第8回日展初入選。1966年、第9回日展「ひとり」により特選受賞。1967年、第10回日展「女」により特選受賞。1968年、第11回日展「女'68」により菊華賞受賞。1996年、第28回日展「告知」により文部大臣賞受賞。2002年、第33回日展出品作「告知-2001-」により日本芸術院賞受賞。2016年、北茨城市蛭田二郎彫刻ギャラリー開設。2018年旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、岡山大学名誉教授、倉敷芸術科学大学名誉教授。



彫刻 理事
のうじま せいじ
能島 征二

1941年、東京都生まれ。小森邦夫に師事。1964年、茨城大学教育学部美術科卒業。1962年、第5回日展初入選。1969年、改組第1回日展『窮』により特選受賞。1971年、第3回日展『省』により特選受賞。1990年、第22回日展『五月の女』により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展『悠久の時』により文部大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作『慈愛-こもれび』により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



彫刻 理事
やまもと しんすけ
山本 眞輔

1939年、愛知県生まれ。1963年、東京教育大学(現・筑波大学)教育学専攻科卒業。1962年、第5回日展初入選。1972年、第4回日展『生きがい』により特選受賞。1980年、第12回日展『ひたむき』により特選受賞。1992年、第24回日展『いい日』により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展『森からの声』により内閣総理大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作『生生流転』により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、名古屋市立大学名誉教授。



彫刻 副理事長 事務局長
かんべ みつひろ
神戸 峰男

1944年、岐阜県生まれ。清水多嘉示、木下繁に師事。1967年、武蔵野美術大学造形学部卒業。1968年、第11回日展初入選。1976年、第8回日展『裸婦』により特選受賞。1978年、第10回日展『裸婦』により特選受賞。2006年、第38回日展『長風』により文部科学大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作『朝』により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長 事務局長、日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授。



洋画 理事
まちだ ひろふみ
町田 博文

1953年、茨城県生まれ。寺島龍一に師事。1976年、茨城大学卒業。1982年、第14回日展初入選。2000年、第32回日展『雪の朝』により特選受賞。2003年、第35回日展『新雪の麓』により特選受賞。2018年、改組 新第5回日展『新雪の河畔』により文部科学大臣賞受賞。現在、日展理事。



洋画 監事
なんば しげる
難波 滋

1944年、岡山県生まれ。柚木祥吉郎、三宅幹一郎に師事。1997年、第29回日展初入選。2000年、第32回日展『哀華逍遙』により特選受賞。2001年、第33回日展『逍遙・たらちねの…』により特選受賞。2005年、第37回日展『逍遙・水無月』により日展会員賞受賞。2016年、改組 新第3回日展『逍遙・十六夜』により文部科学大臣賞受賞。現在、日展監事。



彫刻 顧問
なかむら しんや
中村 晋也

1926年、三重県生まれ。東京高等師範学校卒業。1950年、第6回日展初入選。1967年、第10回日展『華の譜』により特選受賞。1968年、第11回日展『想華の詞』により無鑑査・特選受賞。1969年、改組第1回日展『宴の華』により菊花賞受賞。1981年、第13回日展『星のいのり』により日展会員賞受賞。1984年、第16回日展『焦躁の旅路』により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作『朝の祈り』により日本芸術院賞受賞。1996年、中村晋也美術館を設立。1999年、勲三等旭日中綬章受章。2002年、文化功労者。2007年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、鹿児島大学名誉教授、筑波大学名誉博士。



彫刻 顧問
かわさき ひろてる
川崎 普照

1931年、東京都生まれ。斎藤素蔵、平野敬吉、進藤武松に師事。1961年、第4回日展初入選。1964年、第7回日展『暖流』により特選受賞。1993年、第25回日展『未来への讃歌』により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作『大地』により日本芸術院賞受賞。2007年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



書 理事
つちはし やすこ
土橋 靖子

1956年、千葉県生まれ。日比野五鳳、日比野光鳳に師事。1979年、東京学芸大学書道科卒業。1980年、東京学芸大学専攻科(書道)修了。同年、第12回日展初入選。1992年、第24回日展「雪」により特選受賞。1998年、第30回日展「夕されば」により特選受賞。2008年、第40回日展「良寛春秋」により日展会員賞受賞。2016年、改組新第3回日展出品作「墨染」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組新第4回日展出品作「かつしかの里」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本書芸院理事長。



書 理事
まがみ ぎどう
真神 巍堂

1943年、京都府生まれ。村上三島に師事。1967年、京都教育大学美術科書道卒業。1968年、第11回日展初入選。1992年、第24回日展「五嶺」により特選受賞。1996年、第28回日展「舒位詩」により特選受賞。2009年、第41回日展「于謙詩」により日展会員賞受賞。2016年、改組新第3回日展「轆轤」により東京都知事賞受賞。2017年、改組新第4回日展「碧澗」により文部科学大臣賞受賞。2019年、改組新第4回日展出品作「碧澗」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



書 監事
うしくぼ ごしょう
牛窪 梧十

1945年、埼玉県生まれ。西川寧、小林斗盞に師事。1979年、東京教育大学(現・筑波大学)卒業。1977年、第9回日展初入選。1996年、第28回日展「杜甫詩」により特選受賞。1998年、第30回日展「李白詩・送殷淑」により特選受賞。2019年、改組新第6回日展「岑参詩」により文部科学大臣賞受賞。2022年、第8回日展出品作「陸游詩」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展監事。



書 顧問
おざき ゆうほう
尾崎 邑鵬

1924年、京都府生まれ。廣津雲仙、辻本史邑に師事。1954年、第10回日展初入選。1963年、第6回日展「陸游の詩」により特選・苞竹賞受賞。1970年、第2回日展「高青邱詩 送陳少府赴嘉定」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「竹窓」により日展会員賞受賞。1986年、第18回日展「高青邱詩」により文部大臣賞受賞。1993年、第24回日展出品作「杜少陵詩」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化功労者。現在、日展顧問。



書 副理事長
くろだ けんいち
黒田 賢一

1947年、兵庫県生まれ。西谷卯木に師事。1969年、改組第1回日展初入選。1986年、第18回日展「山里」により特選受賞。1990年、第22回日展「ふじの雪」により特選受賞。2003年、第35回日展「深雪」により日展会員賞受賞。2009年、第41回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「小倉山」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員。



書 理事
たかき せいう
高木 聖雨

1949年、岡山県生まれ。青山杉雨、成瀬映山に師事。1973年、大東文化大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1989年、第21回日展「天馬」により特選受賞。1993年、第25回日展「建始」により特選受賞。2006年、第38回日展「協穆」により日展会員賞受賞。2015年、改組新第2回日展「駿歩」により文部科学大臣賞受賞。2017年、改組新第3回日展出品作「協戮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、謙慎書道会理事長、全国書美術振興会理事長、大東文化大学名誉教授。



書 理事
ほし こうどう
星 弘道

1944年、栃木県生まれ。浅香鉄心に師事。1967年、立正大学卒業。1975年、第7回日展初入選。1990年、第22回日展「蘇東坡詩」により特選受賞。1992年、第24回日展「曾鞏詩」により特選受賞。2007年、第39回日展「李濂詩」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「小学之一文」により文部科学大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「李頎詩 贈張旭」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



工芸美術 理事
み た むら ありすみ
三田村 有純

1949年、東京都生まれ。祖父の三田村自芳、父の三田村秀芳、高橋節郎、田口善国に師事。1973年、東京学芸大学教育学部美術科(工芸専攻)卒業。同年、第5回日展初入選。1975年、東京藝術大学大学院美術研究科(漆芸専攻)修了。1985年、第17回日展「ピラミス・遙か天空に」により特選受賞。1988年、第20回日展「ピラミス・嵩峻」により特選受賞。2014年、改組新第1回日展「炎立つ」により日展会員賞受賞。2016年、改組新第3回日展「月の光 その先に」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組新第3回日展出品作「月の光 その先に」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、東京藝術大学名誉教授。



工芸美術 理事
いはや けいじん
井隼 慶人

1941年、京都府生まれ。小合友之助、佐野猛夫、三浦景生に師事。1967年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)工芸科染織専攻科修了。1979年、第11回日展初入選。1987年、第19回日展「山気」により特選受賞。1993年、第25回日展「静韻」により特選受賞。2016年、改組新第3回日展「春のゆく」により日展会員賞受賞。2019年、改組新第6回日展「積日惜夏」により文部科学大臣賞受賞。現在、日展理事、京都市立芸術大学名誉教授。



書 顧問
ひびの こうほう
日比野 光鳳

1928年、京都府生まれ。父の日比野五鳳に師事。同志社大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1975年、第7回日展「春」により特選受賞。1978年、第10回日展「春」により特選受賞。1987年、第19回日展「天の海」により日展会員賞受賞。1997年、第29回日展「三日月」により内閣総理大臣賞受賞。1999年、第30回日展出品作「花」により日本芸術院賞受賞。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



書 顧問
いしげ けいどう
井茂 圭洞

1936年、兵庫県生まれ。深山龍洞に師事。1961年、京都学芸大学(現・京都教育大学)美術科書道卒業。同年、第4回日展初入選。1977年、第9回日展「梅」により特選受賞。1979年、第11回日展「富士山」により特選受賞。1993年、第25回日展「無常」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展出品作「清流」により内閣総理大臣賞受賞。2003年、第33回日展出品作「清流」により日本芸術院賞受賞。2018年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都教育大学名誉教授。



工芸美術 顧問
いとう ひろし
伊藤 裕司

1930年、京都府生まれ。山崎覚太郎に師事。1953年、京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸コース漆芸科卒業。同年、第9回日展初入選。1966年、第9回日展「刻象“大地”その内なるもの」により特選・北斗賞受賞。1968年、第11回日展「燦光」により特選・北斗賞受賞。1983年、第15回日展「収穫」により日展会員賞受賞。2004年、第35回日展出品作「ササノオ聚抄」により日本芸術院賞受賞。2018年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



工芸美術 理事
はるやま ふみのり
春山 文典

1945年、長野県生まれ。蓮田修吾郎に師事。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1977年、第9回日展初入選。1979年、第11回日展「四角柱イン・セクション」により特選受賞。1984年、第16回日展「無限標」により特選受賞。2000年、第32回日展「風の門」により文部大臣賞受賞。2004年、横浜美術短期大学(現・横浜美術大学)学長。2016年、改組新第2回日展出品作「宙の河」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、横浜美術大学名誉教授。



工芸美術 理事
よしかわ はたお
吉賀 將夫

1943年、山口県生まれ。1969年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1975年、第7回日展初入選。1983年、第15回日展「夜明け」により特選受賞。1985年、第17回日展「曜」により特選受賞。1996年、第28回日展「萩釉広口陶壺『ある光景の印象』」により文部大臣賞受賞。2000年、第31回日展出品作「萩釉広口陶壺『曜'99・海』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、山口大学名誉教授、萩陶芸美術館・吉賀大眉記念館理事長。



工芸美術 理事長
みやた りょうへい
宮田 亮平

1945年、新潟県生まれ。1970年、東京藝術大学美術学部工芸科卒業、同年、第2回日展初入選。1972年、東京藝術大学大学院美術研究科工芸(鍛金)専攻修了。1981年、第13回日展「ゲルからの移行『8』」により特選受賞。1997年、第29回日展「ばーるんぐ」により特選受賞。2005年、東京藝術大学学長。2009年、第41回日展「シュプリングン『悠』」により内閣総理大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「シュプリングン『翔』」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化庁長官。現在、日展理事長、東京藝術大学名誉教授・顧問。

三沢 忠
三原捷宏
守長雄喜
守屋順吉
安増千枝子
柳瀬俊泰
山田郁子
吉崎道治
李 暁剛
和田 貢
渡邊 明
渡辺啓輔
渡辺雄彦
渡邊裕公

彫刻
(128名)

中村晋也
川崎普照
蛭田二郎
能島征二
山本眞輔
神戸峰男
山田朝彦
宮瀬富之
池川 直
安藤孝洋
阿部鉄太郎
青山三郎
井上周一郎

高梨芳実
竹留一夫
竹久秀樹
立花 博
寺久保文宣
土井原崇浩
歳嶋洋一朗
中川澄子
永田英右
檜崎重視
成田禎介
西田伸一
西田陽二
西谷之男
西房浩二
西山松生
錦織重治
長谷川 仵
濱本久雄
日野 功
平野行雄
武藤初雄
福井欧夏
福島隆壽
福田あさ子
星川登美子
前田 潤
前原喜好
松下久信
松田 茂
松野 行
丸山 勉

大谷喜男
岡田征彦
岡本 猛
加藤寛美
鍵主恭夫
片岡世喜
金山桂子
木原和敏
菊池元男
北本雅己
桐生照子
久保博孝
工藤和男
熊谷有展
倉林愛二郎
栗原高光
桑原富一
小関修一
小牧 幹
古賀英治
児島新太郎
児玉健二
佐藤祐治
佐藤龍人
阪脇郁子
櫻田久美
清水 優
杉山吉伸
鈴木順一
鈴木 實
田中里奈
田辺知治

洋画
(107名)

中山忠彦
寺坂公雄
藤森兼明
佐藤 哲
湯山俊久
小灘一紀
斎藤秀夫
町田博文
難波 滋
青島紀三雄
浅見文紀
浅見嘉正
天野富美男
井上 武
伊藤晴子
飯泉俊夫
池田清明
池田良則
池山阿有
石田宗之
磯崎俊光
一の瀬 洋
稲葉徹應
遠藤原三
小川尊一
小川満章
大竹正治
大友義博
大淵繁樹

古澤洋子
北斗一守
本多功身
間瀬静江
曲子明良
松浦丈子
松崎十朗
松崎良太
丸山 勉
三谷青子
三輪晃久
三輪敦子
水野 收
南 聡
森 美樹
森脇仁士
諸星美喜
安田敦夫
山下邦雄
山下保子
山田 毅
山本 隆
由里本 出
吉村卓司
吉村年代
米倉正美
米田 実
米谷清和

戸田博子
利光洋子
那須勝哉
中出信昭
中村賢次
中村 眞
中村 徹
中村文子
仲島昭廣
仲村良一
成田 環
丹羽貴子
西田幸一郎
西田眞人
野田夕希
能島和明
能島千明
能島浜江
袴田規知代
橋本弘安
橋本正弘
長谷川雅也
長谷川喜久
濱田昇児
林 和緒
林 秀樹
日影 圭
平尾秀明
平木孝志
藤井範子
藤島大千
藤島博文

鍵谷節子
片山侑胤
亀山祐介
川崎麻児
川崎鈴彦
川島睦郎
川嶋 涉
川田恭子
河村源三
木村卓央
木村光宏
菊池治子
岸野圭作
北村恵美子
桑野むつ子
佐々木淳一
佐々木 曜
佐藤朱希
佐藤俊介
佐藤和歌子
坂根克介
坂本幸重
澤野慎平
土農 力
田島奈須美
田所 浩
高田淑子
高増暁子
辰巳 寛
谷川将樹
手塚恒治
寺島節朗

日本画
(121名)

土屋禮一
福田千恵
山崎隆夫
村居正之
渡辺信喜
青木秀明
朝倉隆文
芦田裕昭
荒木弘訓
伊東正次
池内璋美
池田道夫
石井公男
石田育代
石原 進
市原義之
稲田亜紀子
岩田壮平
鶴飼雅樹
上田勝也
内海 泰
大豊世紀
大西守博
岡江 伸
岡田繁憲
岡村倫行
岡本明久
加藤 晋
加藤 智

前田泰昭
待田和宏
南 正剛
宮崎芳郎
向井弘子
向山伊保江
村田好謙
森田清照
安田佳代
山岸大成
山崎輝子
山元健司
山本 清
横山喜八郎
横山善一
吉水絹代
若山裕昭
渡辺洋子

高名秀人光
高橋貞夫
高光一生
竹森公男
武腰一憲
武腰冬樹
立川善治
谷口勇三
谷野吉冬
月岡裕二
寺池静人
得地秀生
友定聖雄
内藤英治
中村武郎
中村三喜雄
並木恒延
南雲 龍
西片 正
西川 實
西本瑛泉
西山邦彦
橋本昇三
林 香君
原 典生
原 益夫
藤田 仁
古瀬政弘
伯耆正一
千田 浩
前川正治
前田和伸

春日井路子
勝 孝
兼田文男
叶 道夫
亀井 勝
川原和夫
河合徳夫
河野榮一
木下五郎
木谷陽子
久保満義
沓澤則雄
栗本雅子
桑原紀子
小西啓介
小林祥晃
小林英夫
厚東孝治
佐々木達郎
佐治ヒロシ
佐藤好昭
志観寺範從
十二町 薫
杉原外喜子
鈴木治平
角 康二
曾根洋司
田中照一
田中紀子
田中嘉生
高岡由美子
高津明美

工芸美術 (111名)

奥田小由女
大樋年朗
今井政之
中井貞次
森野泰明
伊藤裕司
春山文典
吉賀將夫
宮田亮平
三田村有純
井隼慶人
安藤タヅ子
安藤 工
相武常雄
青木宏懂
赤堀郁彦
浅井啓介
浅蔵與成
飴村秀子
有山長佑
石川充宏
磯野清夫
上原利丸
上森四郎
小田謙二
尾長 保
大樋年雄
加藤令吉
司辻光男

榎野仁一
松岡高則
松田裕康
松田安生
南川憲生
宮坂慎司
宮崎雅司
宮里明人
村井良樹
村山 哲
森 矢真人
山崎茂樹
山下 清
山瀬晋吾
山田 進
横山豊介
横山祐三
吉居寛子
吉岡 徹

辻畑隆子
堤 直美
寺山三佳
得能節朗
徳安和博
中口一也
中辻 伸
中原篤徳
中村優子
長岡 強
成富 宏
野畠耕之介
野原昌代
野間口 泉
野村光雄
馬場正邦
長谷川八壽雄
早川高師
原田治展
原田裕明
一鞆田 徹
平戸司郎
平原孝明
廣川政和
福本重喜
二塚佳永子
堀 龍太郎
堀内有子
堀内秀雄
堀尾秀樹
間島博徳
前芝武史

久保 浩
工藤 潔
楠元香代子
熊谷喜美子
栗山賀行
小島靖成
佐藤隆男
寒河江淳二
齋藤尤鶴
櫻井真理
笹山幸徳
柴田良貴
島田見根夫
嶋畑 貢
小代 猛
白石恵里
新澤博志
鈴木紹陶武
鈴木徹男
清家 悟
錢亀賢治
田中厚好
田畑 功
田丸 稔
大丸 敏
高倉準一
高野眞吾
高橋 勇
竹谷邦夫
立山美次
谷口淳一
谷村俊英

伊庭靖二
石黒光二
石崎義弘
石田陽介
磯尾隆司
宇治川久司
宇津孝志
上田ふみ
上田久利
上床利秋
江藤 望
江里敏明
圓鏝元規
小関良太
小野啓亘
小比賀 強
緒方信行
桶本 寿
親松英治
加藤幸男
加茂為男
梶川俊一郎
柏原花子
片山博詞
勝野眞言
亀谷政代司
川崎義昭
川田良樹
河村佳則
木代喜司
清島浩徳
九後 稔

芸術とは何か
創作とは何か

日展作家は語る

森嶋隆鳳
森田彦七
八木山鈴
柳 濤雪
山口耕雲
山根互清
山本高邨
山本大悦
山本悠雲
横山焯平
吉川蕉仙
吉川美恵子
吉澤石琥
吉澤大淳
吉澤鐵之
吉澤劉石
吉田成美
和中簡堂
綿引滔天

辻元邑園
寺岡棠舟
寺坂昌三
堂本雅人
歳森芳樹
内藤富卿
内藤望山
中川裕皓
中路佳保里
中野北溟
中林露風
中村伸夫
永守蒼穹
檜崎華祥
新谷泰鵬
西村自耕
西村東軒
野田杏苑
野田正行
原田 上
日賀野 琢
日比野博鳳
福光幽石
藤岡都逕
舟尾圭碩
前島泉洲
松清秀仙
宮崎葵光
村上俄山
望月和風
森上光月
森川星葉

尾西正成
大澤城山
大平匡昭
岡田契雪
岡田直樹
岡野楠亭
加藤子華
角元正燦
梶山夏舟
河西樸堂
木村通子
鬼頭翔雲
杭迫柏樹
倉橋奇艸
近藤浩乎
佐々木宏遠
澤田虚遊
師田久子
師村妙石
清水透石
芝 松翠
陣 軍陽
鈴木春朝
関 吾心
関 正人
田頭一舟
田頭央洩
田中節山
田中徹夫
高木厚人
竹内勢雲
樽本樹邨

書 (112名)

日比野光鳳
井茂圭洞
尾崎邑鵬
黒田賢一
高木聖雨
星 弘道
土橋靖子
真神巍堂
牛窪梧十
赤江華城
明石聰濤
新井光風
有岡郟崖
井上清雅
伊藤一翔
伊藤仙游
池田桂鳳
石坂雅彦
石田雲鶴
石飛博光
一色白泉
市澤静山
今村桂山
岩永栖邨
植松龍祥
海野濤山
梅原清山
遠藤 彊
尾崎蒼石

工芸美術 — 宮田亮平

金工作家 — 日展理事長



上野の東京藝術大学に入学した日から五十余年。母校の学長を十年間勤め、二〇一六年を最後にその職を離れたが、もっと遡れば、祖父の代から兄弟を含め九人が藝大に関わったという。

今回は宮田さんと縁が深い東京藝術大学美術学部工芸科鍛金研究室の協力を得て取材をさせていただいた。藝大の門から鍛金研究室の建物までの道のり、木々の生い茂る道なき道を案内くださり、まずは岡倉天心像がある六角堂を拝み、それから林の中を通り抜けて、校舎へと向かった。生い茂る木々や切り株に「いいなあ。変わらないなあ」と語る宮田さんの藝大への思いはこのときからひしひしと感じられた。

天井の高い広々とした伝統ある鍛金研究室で、宮田さんが持ってきた鞆の中からおもむろに取り出したのは金づちであった。学生の時に自分で作って六十年弱使っている愛用のものである。



し世の中が前向きでその波に乗っていく風潮があった。長兄の家に下宿し、お茶の水美術学院に通った。その途中、千駄ヶ谷を通るときにオリンピックの聖火が見えた。これまでの人生を振り返り、宮田さんにとってエポックとなる年は、不思議と何か世の中の動きが重なるという。二浪をして藝大へ入学した年は、安保の年。大学三年になると大阪万博があった。そこで大規模なテントのための模型を工夫して作るなど面白い経験もした。

日展との出会いから

日展との出会いは、遠い遠い記憶に遡る。長兄が学生の時に日展で特選を受賞し、母の背中におんぶされて、父と三人で東京都美術館へ行ったことが記憶の中にあるのだ。宮田さんと日展、そして上野は切っても切れない深い縁があるのを感じる。

日展に出品することはごく自然な流れであった。藝大の鍛金研究室には学生も含め三十人ほどがいて、夏になると全員が日展の制作に取り掛かり、搬入間際まで作り込み、できたての作品をリヤカーに積んで、上野の森を通って隣の東京都美術館まで運ぶのが恒例だった。鍛金の複雑な工程は決してひとりですべてはできない。皆で励ましあって作り、一人ひとりの制作を目的にしたりにし、また早く終えれば教授の制作を手伝うことで自分が経験していないいろ

佐渡の蛭型鑄金の家に生まれて。数値で測れない芸術の歓び

宮田さんは一九四五年、新潟県佐渡の伝統工芸の町で七軒ある蛭型鑄金の家の、七人兄弟の末子として生まれた。祖父の宮田藍堂さんは著名な鑄金家である。宮田さんと二十歳離れた長兄は、父親と並び、競い合って毎年日展に出品していた。佐渡の豊かな自然と、生活の中に芸術が深く根ざしている環境の中で育ち、五歳の時には、白い扇とそろばんを目の前に置かれ、どちらを選択するか両親に問われたという。白い扇を選んだ宮田さんは母や姉と能の稽古に行くようになった。



「シュプリング」1991年 第23回日展 国立工芸館蔵

ある日、宮田さんは壁にぶち当たる。それは常に優秀な兄や姉と比較されてしまうということだった。飛び級で東京美術学校（現東京藝術大学）へ進み、学生時代に特選を受賞した長兄をはじめ、兄弟全員は美術の世界へ進んだ。「同じ兄弟なのにお前はたいしたことないね」と言われたり比較されてしまうことが嫌で、芸術以外の道へ進もうとずっと探していた。動物が大好きで、獣医も考えた。家の裏は海で、表は山という自然の中で育ったことも影響している。しかし、高校一年の夏に初めて藝大のキャンパスへ行き、その世界の魅力に惹かれ、高校二年の終わり頃には、美術というのが一番、人間の心の中で輝くものを表現する世界なんだと気付いた。あまりに工芸の世界にどっぷりつかってしまっていた環境にいたため、本当の良さに気付かなかったのだ。「芸術は評価を数字で表さない。うまい下手ではなく、「いいね、面白いね」という感覚が好きだったんです。これは美術芸術の世界だと思いました」。

受験を機に東京へ

受験を迎えた高校三年の冬、佐渡から出た船が新潟の港に着くとそこからは東京へ向かう集団就職の列車と一緒に乗って、上野駅に降り立った。一九六四年のことだった。受験には失敗してしまったが、その年は東京オリンピックがあり、新幹線が開通

Profile MIYATA RYOHEI

1945年、新潟県生まれ。1970年、東京藝術大学美術学部工芸科卒業、同年、第2回日展初入選。1972年、東京藝術大学大学院美術研究科工芸(鍛金)専攻修了。1981年、第13回日展「ゲルからの移行『8』」により特選受賞。1997年、第29回日展「ばーるんぐ」により特選受賞。2005年、東京藝術大学学長。2009年、第41回日展「シュプリング」により内閣総理大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「シュプリング」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化庁長官。現在、日展理事長、東京藝術大学名誉教授・顧問、国立工芸館・顧問。





「これまでも常に周りに刺激を与えてくれる環境の中に飛び込んできました。理事長というのはコンタクター。今は新たな出発で面白いかなという気分になっていきます。宮田さんはどんな難題も機転をきかして面白さに切り替えていく。「そして日展には何より育ててもらっているという感じがとても強いです。良い意味での競い合い。今年はこの見えない作品を作ったなというのを見ればその努力がわかる。そうすると自分も負けずに頑張る。それでも、もっともっと励まなければいけないと思っただけのステップにもって



「シュプリングエン22-1」2022年



「鍛金の諸君へ。明日は君達のものだ!!」
鍛金学生室の壁に掲げられた直筆の色紙

日展一一五年目に理事長就任

しかし、いちばん驚いたのは日展理事長に決まったことだ。ふだんは決して緊張しない宮田さんが、先日初めて緊張というものを味わったという。日展の総会で難段に座ると、好きな、尊敬する先生たちが大勢目の前に並んでいる。さまざまな世界観ですばらしい作品を作っている先生方の前で話すことに緊張が高まった。日展は今年一一五年目という節目の年であり、また奥田小由女前理事長による大改革から九年目となる年の理事長就任だ。

「これまでも常に周りに刺激を与えてくれる環境の中に飛び込んできました。理事長というのはコンタクター。今は新たな出発で面白いかなという気分になっていきます。宮田さんはどんな難題も機転をきかして面白さに切り替えていく。「そして日展には何より育ててもらっているという感じがとても強いです。良い意味での競い合い。今年はこの見えない作品を作ったなというのを見ればその努力がわかる。そうすると自分も負けずに頑張る。それでも、もっともっと励まなければいけないと思っただけのステップにもって

ろな技術を学べたことが大きな収穫であったという。年に二回、今でも必ず作品を作る。春の現代工芸美術展と秋の日展である。これはサイクルのようになってきた。作ってきた作品は記録として残っていく。「その時々に変化しているのがわかります。最初からずっとイルカを作ってるわけではなくて、時代に合わせて作っているのがわかってよかったですね」。

日展に出品できなかったのはドイツ留学時代の一回のみである。

佐渡で出会ったイルカをテーマに制作。学長、文化庁長官を経て

さて、卒業後、藝大に残り、准教授として指導にあたっていた一九九〇年に在外研修員としてドイツへ留学をしたが、そのときベルリンの壁崩壊に遭遇した。三月にあった壁が七月にはもうなくなったのだ。



「シュプリングエン『翔』」2011年 第43回日展 日本芸術院賞

九一年、ドイツから帰国し、母親のお見舞いで佐渡へ帰郷した帰りの船で、大学受験で東京の折、船上で見た運命的なイルカの群れとの出会いを思い出す。そこで

想を得て自分が勇気をもったように、見る人が元気になるイルカの作品を作りたいと思ひ、制作を始める。ドイツ語で「飛翔」という意味のシュプリングエンシリーズである。九七年には教授に就任。二〇〇五年には六十歳で東京藝術大学の学長に就任し、国立大学の法人化に伴い、様々な新企画を立ち上げた。その間、日展では審査員を経て幹部として運営に携わろうという時期、二〇一六年に文化庁長官に任命された。そこで、すべての役職を辞めることになった。文化庁長官を受けたときのエピソードが

ある。「大臣室で文部科学大臣から任命書をもたらしますが、そのとき『わかりました。長官はやりませんが、芸術家はやめません』と断言したら皆がどっと沸きました。もうその場で言い切るしかないと思っていました。長官職だけやっていたら私は死んでしまう。生きていけるけれど感性が死んでしまう。判断力が死んでしまう。想像力が死んでしまう。この年齢にとって一番大事なことだと思っただけで、ずっと永続的にやっていけるのは長官職ではなくて、芸術家として日展に出すことだと思っただけです。基本的に、展示されたかどうかは別として、制作が途切れたら終わりで、息をしているのと同じように作り続けていることが大事だと思っただけです。多忙な日々を送る中、どうやって時間をやりくりされるのだろうか。「一日二十四時間しかない。その中でどれだけ集中して作れるかがすごく大事なことでしょか」。

話はオリンピックのエンブレム問題やコロナ、文化庁の京都移転など、あまりに多くのエポックなことに及んだ。「君子危うきに近寄らず」じゃないけれど僕は君子でないから危うきがわからない。ただ自分が関わるときは予想はしないけれど何か予感がしたりして、でも多くの人の協力を得てなんとかみなうまくなりました。振り返ると本当に不思議な人生でした」。

作品も覚えているし、一昨年のも覚えています。すごいなと感じる気持ちにしたいし、刺激を受けたい。逆に出品者は見られることの緊張感を得る。そういう場としてとらえることが大事なのではないかという気がします」。

長官の任期を終えた二〇二一年の作品。「僕一人では長官は務まらなかった。組織があつてうまくなりました。みんなのおかげだなと思っただけに、組織になぞらえて群れているイルカにしました。そして見る方から意見もいただき、次はイルカが波を突き抜けているような感じで作り直しました」。

いろいろな人の声や他の作品から光をあてられることで、新たなイメージが湧いてくる。そういう意味で、日展を大事にしている先生方の作品と同じ場所に置かれることで自分というものを発見できる。そして自分の生活感の変化を作品の中に表現できる。宮田さんにとって日展は、なくてはならない存在としてあり続ける。

村居正之



大阪のベッドタウン、吹田市の閑静な住宅地にアトリエを構える村居正之さん。京都出身であるが、結婚後、大阪に居を構え、岡山大学の後、大阪芸術大学で教鞭を執っている。三十年あまり、ギリシャをテーマに、夜の静寂に浮かび上がる古代遺跡などを数多く描いてきた。その深い群青のトーンはいかにして生まれてきたのか。岩石から群青の岩絵の具を実際に自身で作るといふ村居さんの画家としての歩みを尋ねた。

小・中学校で美術教師と出会い、日吉ヶ丘高校へ進学

村居正之さんは、染織工場に囲まれ機械の音がする京都の町で生まれた。画家への道をたどってみると、まず小学校一年生の時の担任が美術の専門教師であった。しかも、京都でも指導的な立場の先生で学校



「孤」2007年 第39回日展

全体が美術に力をいれており、水曜は四時間とも美術の授業、土曜の午後には特別に美術指導があった。村居さんは京都市の展覧会に入選し、東京で作品が展示されたこともある。中学校でも担任は美術教師であったが、当時美術の成績は振るわず、野球部に在籍。それでも三年の二期からまた美術部で絵を描き出した。

自然な流れで高校は美術工芸の日吉ヶ丘高校へ進みたいと思った。日本画を選択し

個性で、それを鍛えて自分の持ち味を生かしていけばよいのだとやがて気付いていったという。

池田遙邨先生との出会い。オンラインワンの世界を目指す

卒業後、二十歳の時に、先輩の紹介で画塾青塔社の門を叩いた。それまでは、親の勧めるデザイナーや職人の世界もあり、悩んでいた。しかし、池田遙邨先生からプロの絵描きになる決意を聞かれ、すぐに「はい」と答えた。将来のことはわからないが、なりたいたいという気持ちだけで進んだ。「例えば天から蜘蛛の糸が一本ずつと降りてきてそれにぶら下がる。いつ切れるかわからない。雲の上が何なのかすらわからない。でもひょっとしたら絵の道で一流になれるかもしれないという夢があるから努力ができるのではないか。その思いだけでした」。「画家になりたい、一度でいいから日展に入選したい」という気持ちで、月に一度の研究会に作品を持っていき、先生や先輩の指導を受け、師の姿を見て学んだ。

日展には早くから挑戦したが二度落選し、三度目は作画に悩んで出さなかった。二十四歳で初入選となるが、それは、今まで習ってきたことを捨てた結果であったという。「高校時代に習った三人の先生の築かれた世界を描いても自分の世界ではなかった。オンラインワンの自分の絵が描けて

たのは、両親から京都の伝統産業に従事できるかもしれないと勧められた結果であるという。美術部の十六人が入学試験を受けて四人のみが合格した。しかし、入ってみて劣等生だったと振り返る。日本画専攻の学生二十一名の中で、ひとりだけデッサンでダメ出しをされてしまったのがとても記憶に残っている。振り返れば、皆より仕事に粗かったこともあるが、「全体を把握する」という点では個性があった。欠点こそ

いませんでした。池田遙邨先生は『自分の道を行け』というお考えでしたので、自分の道を探して、やってはいけないことばかりやって入選しました」。研究会では当時の価値観から離れた仕事も奨励されたのだ。たとえば、日本画のスケッチ、下図、草稿、本紙に描くという手順をすべて止め、北海道の廃村のイメージを描いた。その頃、油絵も少し勉強していたので、以前出品したパネルの上にジंकホワイで壁を描いたところ、はじめてしまい絵の具が乗らなかつたが、先輩の指導で大根おろしの液を塗って上から描くと岩絵の具がついた。藤田嗣治先生の白い地肌が好きで、そういうマチエールの壁を作ってみたかったという画面に直接構図を作り、油絵の具を日本画で使ったのだ。

研究会ではさらに「絵の中に風が吹くといいね」と言われ、レースの夏服の切れ端に胡粉をつけて上からローラーで押して、風が吹いている様子を表現した。

そうして初入選。作品は特選候補にもなったという。「当時、審査主任は杉山寧先生でNHKの日曜美術館に出していただけ、アドバイスをいただいたことは作家人生の貴重な指針となっています」。

ギリシャをテーマに夜の遺跡を描く

その後の転機は、海外取材であろう。二十六歳のときに五カ月ほどヨーロッパを





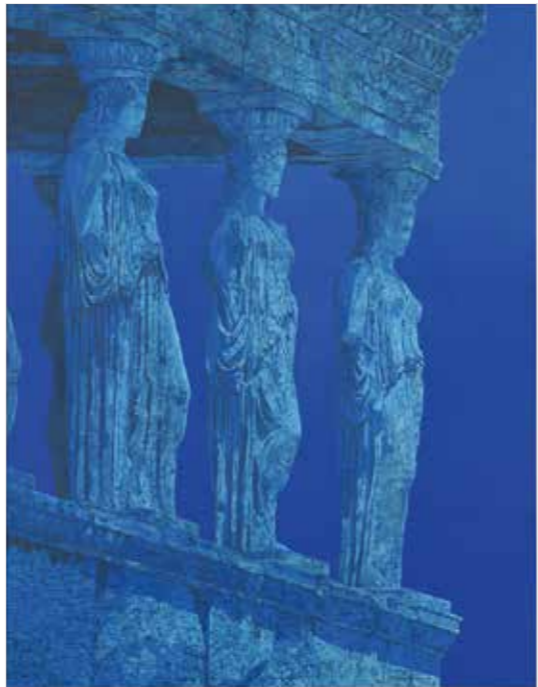
取材している。「京都生まれの町育ちなので、自然風景よりも都会風景のほうが落ち着くんです」。町の景色を多く描いていた。

七五年に二十八歳で特選を受賞。ベン・シャーンや国吉康雄、アンドリュー・ワイエスが好んで影響された作品である。最初研究会では評価が低く、三日三晩徹夜をして絵を重厚にしたところ、特選となった。この時、初めて父親も絵描きになることを認めてくれたという。

三十二歳のときにはフランスとポルトガル、ギリシャ等を一カ月半ほどかけて回った。そして新宿に高層ビルが建ちだした頃、どうしてもニューヨークを描きたいと思い現地向かった。

その頃、シルクスクリーンを画面に刷り、その上からブラインドを描いた作品も発表した。最初は落選であったが、再チャレンジで入選。写真製版を使って刷り込んでそれをベースに描き上げる、そうした画期的な取り組みであった。その後四十三歳の時、サンマルタン運河を描いて二度目の特選となる。

こうして、対象も含め次々画風を変えていたが、それを先生方から指摘され、今度は一つ決まったテーマで長く続けてみようと思った。そうして今日まで続くギリシャをテーマにした作品制作が始まる。「まさか三十年続けるとは思わなかったのですが、本格的に取材を重ねながら描くようになり



「悠」2021年 第8回 日展

のことだ。中国の留学生からお土産に天然の群青を少しもらい、中国で販売していることを初めて知った。そこで、留学生が里帰りするときに一緒に連れて行ってもらい、岩絵の具を買うことができた。そうしたことから興味をもち、岩石を手に入れて自分で作るようになったのだ。「日本の天然の群青は非常に高価であるため、少しでも安価に手に入れる方法を探したのと、その面白さに惹かれていきました」。群青の絵の具は岩石の産地の違いによっても種類がないということがわかっていった。現在では、できた絵の具から発してどういう絵を描いたらいいかを考えることもあるという。こうしてオリジナルの絵の具を作った二十

年ほどになる。また、村居さんの静謐な画面を作り出す



「ブラインド」1978年 第10回 日展

ました」。

若い頃は自由な発想でシルクスクリーンを使ったり、試行錯誤を繰り返したりして、その後、原点に立ち返った。「ギリシャは自分をもう一度作家としての本筋へ戻してくれたのかもしれませんが。ギリシャでは白い画用紙に黒い鉛筆でスケッチすると形が取れず悩みましたが、色画用紙に白い鉛筆で描くとできたり、あちこちぶつかって学んで修正しての繰り返しです」。

なぜギリシャを選んだのだろうか。

「その美しさに何よりも心惹かれました」。一番印象に残っているのは初めてギリシャへ行ったとき。飛行機が遅れてひとりホテルにたどり着くと明け方だった。昼頃に目が覚めてカーテンを開けると目の前に真っ

白いバルテノン神殿が飛び込んできた感動は今も忘れられない。「取材するうちにギリシャの歴史や過去の遺跡に触れ、文明のすごさが静かな夜の世界に感じられたんです。ギリシャ文明は紀元前五世紀のものでキリスト教文明ではないので、東洋人の私には入りやすかったという思いがあります。地中海気候で夜の澄んだ外の気持ち良さのなかに悠久の時を感じ、青と白の世界から、やがて群青を使って夜を表現するようになっていました」。

イタリア南部、シチリア島やトルコの西側などにも対象を広げ、その遺跡を取材していった。

四十代の頃、ミコノス島で不思議な体験をした。「夜中に目が覚めて海に映る月をスケッチしていたところ、夜が明けてくるときに、一面がすべてブルーに変わっていった時がありました。ほんの五分か十分ほどなのですが、真っ白なギリシャのホテルに青い空気が入ってくるような錯覚に陥り、空気が元になって、どんどん青い世界に入り込んでいきました」。

自ら作る群青の

岩絵の具から発想する

村居さんの特徴的で印象的な美しい群青の世界は、自身で作る岩絵の具によるものだという。そのきっかけは四十代半ば、岡山大学教育学部の非常勤講師をしていた頃含めて修得してほしいと思っています」。

今後の抱負を尋ねると、「天然の岩絵具の自然の持っている深さに自分の絵が助けられている感じがしています。だから大事にその色を生かしたいと思いますね。石のの違いでいろいろな幅があるので、どうしても群青にこだわって『群青の墨絵』のような表現を目指し、群青だけで白梅紅梅を描いてみたいのです。紅梅の色をブルーだけで出せるか、感じられるかというところ、そこまでまだ至っていないので、いずれそうした表現をしたいと思っています。また今後、自分の生まれ育った京都の町をもう一度俯瞰した形でオンリーワンの京都を表現したいと考えています。石庭に新雪が降るとき、秒速二十センチ、三十センチで雪が落ちていく速度を描いてみたい。また庭に降り注ぐ月光の光を描いてみたい。それで雪月花を描けたらいいなという思いを持っています」と目を輝かせる。「群青の墨絵」の表現を目指し、村居さんの創作意欲は、留まるところを知らない。



小灘一紀



大阪府の南、堺市。緑豊かな住宅地を行くと、色とりどりの花が咲く手入れされたイギリス風の庭園と木のぬくもりの感じられる建物が見える。庭には昆虫をはじめ自然界の生き物もいろいろ。さまざまな季節の果物も収穫できるそうである。白い毛並みのよい猫もくつろいでいる。庭園に面したアトリエの前には彫刻作品も置かれており、中に入ると、現在制作中の二枚の大作が並んでいた。

『古事記』を西洋絵画で表現することをライフワークとして

小灘さんは、この二十年間、日本の神話に特化し描き続けている稀有な画家である。『古事記』を紐とき、見えてくる日本と日本人の心、その心情を深く作品に表現していくという難しい課題にチャレンジし続けている。物語の初めから最後までを描くと決め、特に西洋の神、ゴッドではなく、我々と一緒に悲しみ笑い、苦しみながら成長していく神々の姿を描こうとしている。

こうした作品制作へ至る、小灘さんの歩みを尋ねた。

小灘さんが生まれたのは戦時中の一九四四年。鳥取県境港市である。生まれてすぐに父親はフィリピンで戦死された。一人っ子の小灘さんは、隣に住んでいた母の弟で教師であった叔父から強い影響を受けて育つことになる。「僕は兄弟がいなくても喋ることが上手でなくて、運動もうまくない幼稚園はすぐ辞めてしまった。小学校でも周りとうまく溶け合わない。授業

で座っているのが苦痛ですぐに教室を飛び出してしまふんです」。麦畑に飛び込んで葉の影に隠れた。厳格な父親のように教育しようとした母から叱られて大きな桑の木に縄で縛られたこともあったと笑いながら振り返る。

美術との原体験となるのが、豪雪のふる里で、スキーで滑る様子を描いた絵である。一生懸命足で踏ん張っている様子を描こうとしたがうまく描けず、広げた足の部分を強調したところ、変な形になっていたとい



「わたつみのいるこの宮」2005年 第37回日展



う。評価は低く、教室の壁に並んで貼られたなかで一番ビリの作品になってしまった。母はそれを見てまたガツカリしたという。いま振り返るとその作品は、苦戦して描いた感情がこもった作品であり、悪い作品ではなかったのではないかと強く思うのだ。こうして学校の成績も喋るのも苦手なのを心配した中学校教師の叔父が朝晩の食事のときに「この芸術家の顔はいいね」といった話し方で音楽や文学、演劇、歴史の話をしてくれた。そして週に三、四回、小学生の小灘さんを映画館へ連れ出してくれたのだ。時代劇やアメリカ映画など、少しずつ文化方面に眼が向くようになった。四年生になると、近所の美術の先生の所に毎週日曜日に通うようになった。島根半島で一日写生をして帰ってくるというものだ。集中力もついて、勉強もできるようになっていった。

ゴッホに共感し、小学校六年で画家としての志を立てる

小灘さんは、小学校六年の時に絵の方で頑張ってみようと思ったという。叔父がたくさん買ってくれた本の中にゴッホの伝記があった。誰からも愛されず、孤独な画家が十年間命がけですばらしい絵を描いたという話で、映画も何度も見た。ゴッホの孤独な心境が自分の心に強く響き、自分も画家になりたいと思ったのだ。叔父はモデ



Profile KONADA IKKI

1944年、鳥取県生まれ。1967年、金沢美術工芸大学卒業。1973年、第5回日展初入選。1992年、第24回日展「窓辺」により特選受賞。1995年、第27回日展「横たわる」により特選受賞。2002年、第34回日展「めざめ」により日展会員賞受賞。2017年、改組新第4回日展出品作「伊須気余理比売」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、日洋会理事。



「編み物をする婦人」
1980年 第12回 日展

リアーナが好きで、映画「モンパルナスの灯」をよく観に行った。モディリアーナはゴッホと同じで亡くなってから認められた。叔父に画家になることを告げると、「画家なんかあったらいかん。どうしてもなりたいたら死んでから認められるくらいの気持ちでやらないとだめだ。そのくらいの覚悟でやりなさい」と。認められる、認められないは関係なく、生き方の燃焼度の高さが重要だと叔父は説いたのだ。そして「米子東高校に東京藝大を出た金畑実先生がおられるからそこに進学しなさい」と言われ、目的校を目指し越境入学をし遠い中学校へ通い、一生懸命勉強した。念願の高校では美術クラブに入り、人とは交際せず黙々と絵を描く日々を送った。放課後と夏休みもすべて美術室にこもって一人で勉強。しかし浪人となる。

京都にもう一人大阪府大に勤める叔父がおり、そこに下宿し、芝田米三先生のところへ弟子入りしデッサンだけを特別に数カ月習うことになった。再度受験の時、先生から「絵の方もいいが、ちょっと彫刻を先に勉強してからでもいいかな」とアドバイスを受け、金沢美術工芸大学の彫刻科に入学することになる。母と父方の祖母が仕送りを、そして叔父達が人生の指針を与えてくれた。「蔭ながら応援してくれる親戚に恵まれたというか、助けあう家族の絆があったんです」。

大学でも一つのことに集中する性分は変

特選は二回とも裸婦でした。その後は肖像画、文化教室・大学講師など、周囲のあたたい応援で今日まで制作に励むことができています」

日本の神話画で

目に見えない世界を描く

「私はもともと一番尊敬しているのは、宗教を失った時代に苦悩するゴッホなんです」。よく読んだ小説はドフトエフスキーで、その深い人間観に惹かれた。学生時代を過ごした金沢では、日本の哲学を確立した西田幾多郎や鈴木大拙、郷里の鳥取の水木しげる等から、眼に見えないものの大切さや人間の力ではどうしようもないものがあることを学んだ。現代の宗教は御利益宗教となり、力がなくなってきたと憂う。本当は目に見えないものを大事にしてきたのは日本人であり、自然の中にも神が宿る。そうしたことに徐々に目覚めるようになって、後々の神話を描くきっかけとなった。今から二十年ほど前のことだ。

「古事記」の三分の一は舞台が山陰だと書かれています。悠久の昔のご先祖様の活躍をいきいきと絵画でよみがえらせたいと思います。かつて『古事記』は全然見向きもされないようなものだったけれども、江戸時代に本居宣長が読み解き、現代に繋がるようになりまし。今では漫画でもブームになって、宮崎駿の『もののけ姫』

わらず、彫刻のことはかり考える学生生活であった。彫刻のデッサンは納得いくまで描けたが、作品はなかなかうまくいかず、すべてつぶしてしまっただけという。卒業時にはようやくひとつだけ彫刻作品が完成した。

教師生活と日展制作

卒業後は自立しなければならぬ。大阪の教員採用試験を受けることにした。堺市の学校に採用が決まり、三国丘小学校で美術の専科を教えることになった。その間、京都の叔父の紹介で、同じ鳥取出身の夫と結婚。

次に赴任した中学校は荒廃しており、生徒指導に苦労した。生徒との対話が必須であったことから、話すことも苦でなくなっただけという。職員会議などで学校から帰るのは午前様であったが、食事後すぐに絵に没頭した。「親に援助してもらいながら、大学に行き就職もした。ただ最初に立てた志だけは忘れず絵を描きました」。学校の仕事も必死でこなし、クラブも剣道部の顧問と、フル回転の日々を送った。

作家活動は芝田米三先生の勧めで二紀会に。その後白亜会から日洋会に所属。「母を喜ばせるためには日展だと思って出品していましたがなかなか入選しないんです。日洋会が創立されてそこへ出し始めてから少しずつ絵を批評してもらおう機会も増えました」。

などにも神話が反映されています」。これまで五十数点の神話画を描いてきた。これから描きたいのは登場人物の内面である。ヤマトタケルなどの神々の深い悲しみや苦悩を描きたい。

「真善美」という言葉があります。日本人は生き方に美を求める。その中に『もののあわれ』という言葉があり、そうした生き方が大切とされる。洋画は真を求める。何が本物なのか、何が真実なのか、だからリアルなものを見る。善は孔子や論語の思想。その上、日本やヨーロッパには『中世』が存在します。自己犠牲や義を重んじる騎士道や武士道の文化です。私は美と同

二十九歳の初入選のときのことだ。「上野の美術館に飾られた自分の作品を探すと、二段掛けの上のほうで、ちょっとガックリきました。偉い先生のご批評をいただきたく、初日に絵の前でずつと立ち止まって何時間か待っていたら、尊敬する國領経郎先生が通られて教えを乞いました。『なかなか君の絵はいいね』と、そして『この絵は二段がけにするような絵ではないんだけど』と言われた。それから少しずつ認めていただけました。これまでも先生からいただいた言葉は『この黒はいいね』など魂から絞り出すような短い一言でしたが、それが心に残っています」。

初めての特選は四十八歳。この時は思い出深い。勤務先では年齢を重ねて主任となり、責任も重くなっていた。有給休暇を取ることもなく、任務をこなしていた。養護学校に移り主任をしていたときは過労のピークで、寝言で「学校を辞めて絵に専念したい」と毎日言っていたという。早期退職をした年に特選を受賞。その時は嬉しかった。ここからは絵に専念する日々となる。

「彫刻科の出身でデッサンは勉強していましたが、まず静物画から始めて人物画、風景画となんでもこなしてから自分のものを描くように、との金畑先生の言葉を思い出し、まじめに取り組んでいました。人体は裸婦から始めるというのが西洋画の基本なので、裸婦を勉強していました。日展の

時に義のある魂を込めた作品を描きたい。また、彫刻科出身なものだから昔からミケランジェロが好きで、晩年の「ロンダニーニの聖母」に感動しました。人間には自身自身の心の中、つまり魂を燃焼させながら何か伝えようとするものがある。そうした作品ができればともがいています。けれど芸術には終わりが無い。自分の気持ちを伝えられるような絵を世の中に残せたら。眼に見えないものをどれだけ描けるかです」。自らをモデルにイザナギノミコトの衣装で鏡の前に座り、絵に取り組む画家の姿は、気迫に満ちていた。



「荒海を鎮める弟橘比売命」2012年 第44回 日展

彫刻 — 山田朝彦

彫刻家 — 日展理事



東京都文京区西片、かつての備後福山藩の中屋敷のそばに、山田さんのアトリエや住まい、会社はある。五、六年前に建てられたという天井の高い、白い壁のアトリエには、上の窓から柔らかな光が差し込んでいる。手前の壁や部屋の周囲の棚にはさまざまなオブジェやレリーフ、写真や著名な作家の彫刻などが飾られており、一つひとつが特徴的で、まるで美術館のような空間である。部屋の中央には現在制作中の作品が置かれている。粘土を手にするど先生の表情は変わり、力強い手つきで制作が始まった。

ローマでベルニーニの彫刻に心打たれて

「僕はもう学生時代は柔道ばかりやっていて美術なんて全然興味なかったんです」。彫刻家の先生の第一声である。人生とはある日そんなに劇的に変わるものであろうか。お話を伺った。

「父はかつて画家を目指していましたが、その道には進まず、戦後は美術関係の会社を立ち上げました。僕は四人兄弟の長男なので、子供心にその仕事をしなくてはと、思っていました。彫刻をやるうとは全く考えていませんでした」。父親は広島出身で山田さんも本籍は福山である。昭和十八年、北朝鮮平安南道で生まれ、終戦後、家族は日本に引き揚げた。二歳頃のことなのであまり記憶にはないが、今のウクライナ問題はとも他人

事には思えない。そうした気持ちから今年の作品テーマは「道標^{みちしるべ}2022」となった。戦争の影響を受け、子供の頃は体が弱く運動することができなかったという山田さん。成長につれて徐々に回復し、高校時代は弓道部、明治大学では体育会の柔道部へと進んだ。「道」のつくスポーツはみな、人間を育ててくれ、生き方を教えてくれます。今になってありがたいなと思います」。柔道の試合後は、勝っても負けても平然と対処する。それは相手を思いやる心からだという。

家業を通じて知り合った彫刻家の佐藤忠良先生から最初に教わったのは「隣人を愛せない人間は芸術家になれない」ということ。何度もその話を聞いたという。自分一人では育つことができないし、人と関わることでいろいろな成長があつて指導を受ける。その考えは山田さんの根幹をなす。彫刻との出会いに話を戻そう。大学を卒業した夏、父親から今後家業を継いでいくためにという事で、世界の聖地巡礼の旅をプレゼントされた。少人数のグループの旅で、中東のレバノン、シリア、ヨルダン、エジプト、イタリア、イギリス、フランス、スイス、アメリカ、カナダと聖地を回った。パチカンでは、参加者の中で最年少の山田さんのもとにローマ法王が降りてきて、手を握り、話をされたという体験もある。ローマが最初のヨーロッパの地で同行の画家の老夫妻に誘われるままボルゲー

ゼ美術館へ行った。そこで度肝を抜かれたのがベルニーニのバロック彫刻である。何の予備知識もなく無の状態初めて出会った彫刻の迫力に打ちのめされた。しかし、帰国後は日常の生活に戻った。家の仕事をしながら毎晩のように友人が来ては麻雀を繰り返す日々であった。ある日、これが続けていてはだめだと思い、近くの示現会の研究所でデッサンをやってみようと思った。二十五、六歳になってみがかつてルーヴル美術館で皆が模写していたのを思い出して、最初は絵を描くつもりで始めた。その後、日暮里にある太平洋美術研究所を紹介され、デッサンを一枚描き終わった後に、たまたま隣の模刻の部屋で粘土を触ることがあった。初めて触った瞬間に、この世界はなんだか面白そうだと感じ、方向転換で彫刻をやってみることにした。迷いはなかった。山田さんはいつも過去を振り返ることはしない。「前に進む以外ないんだから好きなことをやって失敗したって」と笑う。柔道で学んだ「負けて元々」という感覚がある。柔道の基本は受け身だという。投げられても怪我をしないように負ける稽古から始まる。こうして、目には見えないが柔道を通して、体で覚えたことは多い。基礎体力も腕力も、現在も彫刻を続ける上で役立っている。

そうして父の会社を継いで、日中はずっと仕事をし、夜は彫刻と向き合った。太平洋美術研究所に行っていたときは、夜七時

Profile YAMADA TOMOHIKO

1943年生まれ。1966年、明治大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1987年、第19回日展「雄」により特選受賞。1990年、第22回日展「若人」により特選受賞。2009年、第41回日展「悠悠」により会員賞受賞。2012年、第44回日展「こもれば」により文部科学大臣賞受賞。2016年、改組新第2回日展出品作「朝の響き」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、日本彫刻会理事。



「礎石」1985年 第17回日展



「こもれば」2012年 第44回 日展 文部科学大臣賞



まで仕事をして、七時半から九時半まで研究所にいた。しかも彫刻について全くわからないところからスタートしたのだ。芯棒の作り方も、粘土のつけ方も、隣の人のを見よう見まねで覚えた。学校ではないので、先輩や仲間がそこにいるだけだったのだ。しかし、それは苦勞ではなく、楽しかったと振り返る。

「有由有縁」。柔道で鍛えた精神

「川端康成の言葉で「有由有縁」があります。全てのことは理由があって、結果、現実結びついていく。全てが縁に繋がっていく。人生、みな同じようなチャンスを持つているけれど、その時に右に行くか左に行くかだけの問題。そういう綱渡りをしながら今日に繋がって来ているわけです」

山田さんを夢中にさせたのは何よりも彫刻が好きで楽しかったということ。「忙しい時に家族もあつたし、いろいろなことを工面しながら続けてこれたのは、やっぱり、こうなりたいとか、あなりたいではなくて、楽しかったんです」。

「美術教育を専門で受けているわけでもないけれど、柔道をやっている、柔道は自然体だから」。一九六四年の東京五輪に出場した柔道部の神永昭夫先生から「自分が小さく丸くなって相手の懐に入れば、相手を大きく投げることができると言われた。神永さんはオリンピックで負けて銀メ

相手の技も見えないし、自分の気が付かないことも感じるし、こうやって表現するのかと気づく場所なんです」。また多くの作家の作品を毎年見ていくとその変化が見えてきて、それも勉強だという。長年出している佐藤静司先生や蛭田二郎先生など決まった先生に見ていただき指導を受けた。こうして積極的に学んでいく姿勢から、食欲に吸収していったのだ。ここまで来られたそのコツを伺うと「好きだったということ、あとは集中力、時間の切り替えだと思っています。特に妻の協力と支えがあったから続けてこれたと思います」。

家業では製作現場から経営まですべてこなし。その上での制作活動である。それができたのも、柔道で培った体力と継続する精神力である。

これまで大変だったと思ったことは一度

ダルでも、翌日会社で平然と仕事をしていった人である。その神永さんから「彫刻を続けなさい。ずっと長く続けることだ」と言われたという。亡くなって三十年ほどになるが、心に残っている言葉が「人生というのは、親から子、指導者から学生へ、先輩から後輩へ、時代から時代へ、その架け橋の一部。その時点で君たちが今あるのだから、自分のやりたいことを一生懸命努めなさいよ」。常にこの言葉をかみしめている。恩師は特選受賞の時も駆けつけてくれた大きな存在である。

錚々たる彫刻家との出会いに学ぶ

さて、日展との出会いである。家業は、メダルやトロフィー、レリーフなど芸術的な作品を製造する仕事であった。そうしたことから、日展の作家にも接する機会があつ

もない。「できないから楽しいんです。制作を始めて二、三週間は一番楽しくて、出上来がって出品する頃は一番落ち込みますね。こんな思いではなかった。自分の思いを越すことはできないんですよ」。

制作へのインスピレーションはどのようなときに湧くのだろうか。「たとえば雲の形ひとつでも、樹を見ても思うことがある。この樹は親父みたいだとか、神永さんみたいだとか、娘みたいだとか、そういう思いで見ていると作ってみたい作品が浮かびます」。もうひとつは世の中の出来事である。最近では3・11。柔道部の後輩の実家が流され、自分の過去がすべてなくなってしまうという。現地を数回訪れて応援したが、彫刻家として何ができるかを考えたときに、寄り添う気持ちを作品に込めようと思った。ここ十年ほどずっとそのテーマで作っている。最初の作品が「朝まだき」。

まだ朝は来ないけれど必ず朝は来るよと。「こもれば」、少し陽が射してきているけれど、もうちょっとの辛抱だから頑張れよという気持ちを込めた。今年はウクライナの問題と、自らが子どもの頃、終戦で引き揚げてきたことが重なり、自分の思いを表現したいと考えた。

今後、創りたい作品を尋ねると、「よく『守破離』という言葉があるでしょう。指導者から指導を受け、エスキースを完成させて、それから次のステップに行くのですが、僕の場合は守破離まで行かない、守破まで。



「思惟」2021年 第8回 日展

た。若い頃、作家のアトリエへ使いに行ったのだ。そこで先生方から伺った話が今では一番の財産となっている。思い出しても、橋本次郎先生、分部順治先生、三坂耿一郎先生、小森邦夫先生、立川義明先生など。制作している姿をいつも拝見していた。在野の先生では、本郷新先生、佐藤忠良先生、加藤昭雄先生、千野茂先生、柳原義達先生、岩野勇三先生など。彫刻の話やものの方などいろいろなことを教えていただいた。それらの話を思い出してはまとめ、ファイルにしている。貴重な記録である。

好きだという思いが全ての原点

太平洋美術研究所で研鑽を積み、山田さんは全国から出品されている日彫展や日展に出し始めた。「出品すれば、その展示会場は神聖な場所で、道場、試合場なんです。

離を求めていくには、どうしたらいいかということですが、やはり精神的なものの追求だと思います。形もそうですが、一番大事なのは、人に受け取ってもらう自分だけのものがあるということ。自分だけ楽しむのほうがいいものではなくて、社会的な責任、社会に還元するという意味で、柔道の中にある深い哲学、精神を含めて表現するということも一つのテーマで、そうした作品を作れたらいいなと思っています」。太古の昔からそうであるように、彫刻には常にメッセージが必要だと考えている。

「若い作家には、朝倉文夫先生が言われた『一日土をいじらずんば一日の退歩』という言葉が響きたい。『毎日粘土を触れ』と佐藤忠良先生からも言われました。それが必ずや豊かな人生になる。積み重ねは大きいです。三十分でもいいからアトリエで制作してください。続けることです」。

現在制作中の作品に目を向ける。少し上向き加減で両手を内側に向けたポーズをとる若い女性像は、自らの意志をもち、明るい希望に満ちた表情で、未来に向けて輝いていた。



伊藤裕司

漆芸家 — 日展顧問

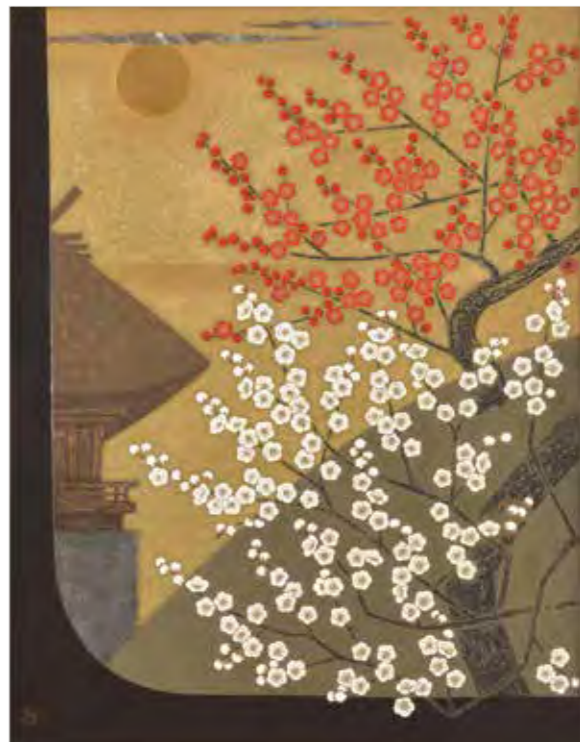


京都駅から車で二十分ほど、京都の西北、右京区嵯峨の緑の多い閑静な住宅地に、漆七十年の漆芸家の巨匠を訪ねた。その作品は、伊勢神宮をはじめ、京都や東京の国立近代美術館などに広く所蔵されている。自宅そばには平安時代中期に寛朝僧正が朝原山の麓に遍照寺を建立する際、本堂の南に庭池として造営したと伝えられる広沢池が広がっている。伊藤さんは、『万葉集』や『古事記』など古典に題材をとることが多い。歴史ある町では自然のことなかもれない。しかし意外なことに、二十代の五年間は東京で修業を積まれた。

京友禅の家に生まれて

きれいに整えられた板の間のアトリエは二間続きで、多くの画集や参考文献などがある一面の書棚の前に、制作をされる机がある。風通しの良い明るい室内。五人のお孫さんの写真も飾られており、隣の部屋には漆を湿った中で乾かす室がある。
伊藤裕司さんは昭和五年京生まれ。ご

実家は中京区で代々、京友禅を扱っている家であった。「そこで大きくなったからまあ絵心はついてしまうよね。実家の家業は弟が継ぎ、私は絵心に執心して、ここまでは来ちゃった。だから親の援助は得られなかった」とにこやかに語る。美術の名門、日吉ヶ丘高校（戦前の旧美校）へ進むことになるのだが紆余曲折があった。その前に目指したのは旧制の工業学校で、高校二年の終わりに終戦を迎えた。それで、世



「梅開上苑」2019年 改組新第6回日展

の中が変化していくなか、自分に備わる才能で工業を学ぶことに疑問を感じ、自分が密かに望んでいた美術学校へ入りなおすことに決めたのだ。ここが大きなターニングポイントであろう。当時の疲弊した経済状況の中で父から、「漆やったら食えるやろう」と言われて、漆工科へ入学することにした。「自分でモノを作るといのが好きだったんだらうね。実習の空いた時間、いろいろな板切れに使い残しの漆を塗っては

喜んでいたな」と振り返る。そこでは指導者の先生にも恵まれた。実家の仕事を手伝えるために休学を余儀なくされることもあったが、五年がかりで二十歳で卒業。そこからが漆の道、七十年である。

二十歳で単身東京へ、 山崎覚太郎先生の内弟子に

次のターニングポイントは、卒業後、京都の染色家皆川月華先生が東京の山崎覚太郎先生へ内弟子として引き受けていただけよう頼んでくださったことである。しかし、終戦後五、六年の東京である。先生も大変な時期で、無理だというお返事であった。しかし、そこでひるまず、「自分でお願いしてきます」と夜汽車に飛び乗って東京へ向かったのだ。朝一番に、経堂にある先生のお宅の扉を叩いた。「奥さんが起きていらして『誰、あんた』『京都の伊藤です』『あら、まあ』と呆れられた。先生も起きてきて『まあ、上がれや』『すいません』。すべてはここから始まった。内弟子となったのだ。

松田権六先生系統の伝統工芸ではなく、山崎覚太郎先生の現代工芸指向の新しい表現を学ぶことになる。先生は美校を卒業して助手から教授になり、終戦までは、ずっと自ずからの作家道と教育者の道を進んでいた方である。ただ、終戦を迎え、世の中が大きく様変わりしたのを機に、「色

漆」を前面に出す制作活動に舵を切られた。「その色漆を僕は直に学んだわけです。だから先生の色漆の洗礼を受けた弟子は僕が初めてだらうね」。内弟子時代は大変な時代だった。先生は現代工芸家として新しいことに取り組んでおられたが、指導は厳しく保守的であった。最初は親戚の家に下宿していたが、後に住み込みとなる。朝一番は掃除から始まった。一家の一員に加えていただき、その家庭に飛び込んでいった形であった。

上京当初はそれほど広い部屋で山崎先生の作品制作を手伝う。「先生から仕込んでいただいた色漆で今日までできて、本当にありがたい嬉しいです」。当時は中国から漆を輸入できず人工の漆を使っていた。「先生はその漆の扱いが苦手で、色漆づくりは僕が全部やらせてもらうなど、面白い思い出もいろいろありますよ」。

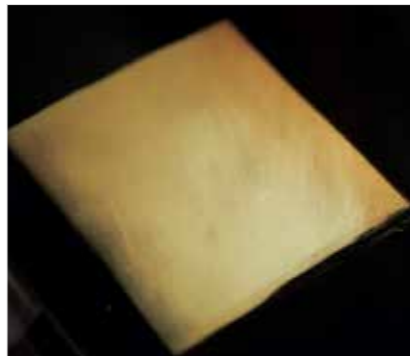
こうして、日展へ出品するのはごく自然な流れであった。先生からは遠慮しないで積極的に出すよう勧められた。三年ほどして、一九五三年、二十三歳で初入選を果たす。「もううれしくて、次々作りましたね」。初入選の作品は現在も京都・蹴上の都ホテルのロビーに飾られている。

「当時、経堂の山崎先生のお住まいは平屋の小さなお住まいでしたが、広い芝生の敷地があり、やがて、先生の故郷富山の薬種問屋の建物を移築することになり、立派な御殿に建て替わったんです」。二階はず





「杜若」2021年 第8回 日展



べて板敷のアトリエで、毎日雑巾がけが大変で、でも楽しかったと振り返る。「あの時代っていうのは僕の仕事一筋の唯一の青春です。怒られたり褒められたりいろいろなことがありました。でも精一杯修業させていただきました」。

こうして弟子を五年ほど続けて、その後は東京で一年ほど過ごした。しかし、食べていくのは厳しく、悩み抜いたうえ、京都に戻ることに決めた。

京都で作家活動を

京都では大歓迎を受けた。東京ですでに作家として活動しており京都の作家にも知られた存在であったから、稼ぎ仕事にも忙しい日々を送ることになる。弟子も取ってたくさん仕事をこなした。ただ、一つ問題があった。それは京都で制作していながら作品が東京風であったことだ。「お盆一枚に絵をつけても、江戸風と京風とは違う。『これあきまへん』って言われて。」それでも仕事は面白く、精力的にこなしていた。やがて弟子を取って数ものやるのがしんどくなってきて弟子を引き受けるのを辞めた。東京から戻って仕事を始めて七年目のことだった。それからはずっと作家として制作の世界に没頭することになる。

順調な作家活動のなかで、審査員になったのは一九七二年からである。京都で漆の出品者は二十人ほどいた。審査員として責

法が入っています」。

最近は何に二作、出品用の大作を作られる。構想は「ちらっと頭にひらめくことから下絵を起こし、それが大きいものになったり小さいものになったりはします。五十号の作品で集中的にやって三カ月かかります。だいたい百日です」。日展と現代工芸展で二回あるため一年の三分の二は大作の制作に費やしてしまう。仕事に対しては集中力を維持することが重要だと語る。大変細かく繊細な仕事である。「だから傍らにいる者が大変なんです。仕事をやり始めると容赦ないんでね。家内はようつきおうてくれていると思う。ありがたいことです」。

日本の古典を題材にさまざまな技法を駆使した「色漆」を

代表作ともいえる作品が『古事記』から



「スサノオ聚抄」2003年 第35回 日展

任をもつことはとてもたいへんなことだったと振り返る。「全員入選は考えられない。辛ある年、大先輩が入選できなかった。辛かったです。いろんなことがありました」。現在のアトリエは、五十七年前に建てたアトリエである。東京から京都へ帰ってしばらくは実家において、それから伏見に借家を借りて、そこから物件を探して毎日自転車で嵯峨まで走って探し、ここに決めたという。家を建てたとき、三歳だった娘さんも今年六十歳になられたという。「本当に早いものです」。

二階から続く別棟の部屋へ案内いただくと、そこには美しい色合いの色漆による日展作品の近作「小牡鹿」「但馬皇女」「梅開

インスピレーションを得て制作したシリーズ。二〇〇〇年代に多く作った。天地生成、アマテラス、神武ノ都、倭建道想、「これは楽しかったね」。作品のことを語ると常に笑顔であり、一作一作にいとおしさが感じられるのだ。

漆の魅力を伺った。「棹地は檜。板で生地を作って、それに糊漆で麻の生地を貼り、その上に研の粉・生漆の水練りの下地漆を数回重ね塗って加工します。漆は湿し風呂の中で、湿ったところで乾かすんです。塗ったまま置いておいたら三日でも四日でも乾かない。湿度が六十パーセント以上でないとならないのです。漆は湿気の中の酸素を吸収して六時間くらいでカリカリに乾きます。刷毛で塗った漆は薄い塗膜ですからね」。

先生は、実際に押し入れのような湿し風呂の中を湿らせて見せてくださった。

上苑」が並べられていた。あざやかな独特の深みのある色が印象的である。

「漆の仕事っていうのはいろいろ素材や技術があるから面白いんですよ。一枚の絵の中で、鉛板を貼っているところもあれば、人物の顔など白いところに卵の殻を使います」。それは漆の白以上の白を求めるためだそうだ。「漆を塗って上から叩くと表面がザクザク凹凸状になる。その上に重ねてもう一度塗って研ぐとザクザクの頭だけ平らになる。そういう効果を研ぎ出し技法といえます。これも二、三色塗り重ねて作るのが一番効果的です。本当にいろいろ面白くてやめられないです。蒔絵の部分には、筆で描いて金や白金を蒔いて磨くという技

「乾いたものの表面を専用の木炭で研ぎ、磨くとびかっと艶が出ます。元々液体の漆が湿し風呂のなかで固体になると、その硬度は硬く、薬品にも強いんです。漆は中国や東南アジアにもあるけれど、四季のある日本で産出する漆の品質が最高です。そしてこれはどの国のよりも上質です。また、塗って研いで磨いて艶を上げる。艶を上げるには日本の漆が一番いいんです。漆は惚れるに足る、一生かけるに十分な素材ですわ。漆と仲良くさせてもらったおかげで大感謝です。本当に奥が深いです」。

これまで制作された作品は、公の美術館に所蔵されているものが多いという。「良い一生でしたよ。九十までやるとは思っていなかったです。九十まで続けられること自体が漆の持っている魅力なんです。漆は部屋がひとつあって、漆の液と表現に必要な加飾のための材料が揃っていれば大丈夫。もうこれで死ぬまでやるといって大丈夫ですね」。

アトリエには小さな黒板があり、ハクボクで万葉の歌が書かれていた。「天の海に雲の波立ち月の舟 星の林に漕ぎ隠る見ゆ」。今年の初めからこれを日々眺め、次の構想を練られている。今後どのような色漆作品を生み出されるのか、九十一歳の巨匠の新作に期待がふくらむ。

土橋靖子

書家 — 日展理事



新宿区の静かな住宅街のなか、土橋さんの仕事場を訪ねた。今年、蛙園会あえんかいという自らの会も新たに立ち上げられた。この教室で作品の指導などをされている。明るい洋間と和室の二間続きで、机の周りには師であり祖父である日比野五鳳先生の書や写真が飾られている。生前五鳳先生が愛用していた着物の端切れで作られたという小さな座布団の上には、信楽焼の蛙の置物が鎮座している。恩師から教えていただいたことをいつも忘れないよう、戒めのためだという。和室では、淡い桃色の可憐な花やひまわりが、凛とした空気のなかに彩を添えていた。



祖父日比野五鳳先生を 人生の師として

「子供の頃、母方の父親、私の祖父である日比野五鳳先生は、よく京都から市川の家泊まりに来ていて、私はとてもかわいがってもらいました。その頃は『京都のおじいちゃんは習字の先生』くらいにしか理解できていなくて、小さい頃から私は父と同じ仕事を目指そうと思っていました」
桜蔭学園の中学校では書道部に入った。そこでは五鳳先生の孫弟子にあたる橋崎華祥先生が顧問として熱心に指導されていて、祖父との繋がりに加え、書を一気に身近に感じるようになっていった。こうして書道部に所属しながら、高校二年の秋までは理系に進むつもりでいたが、いよいよ祖父の世界が面白く思えてきて、進路を変更、書の道へ進むことを決心した。

子供の頃は、母から祖父の折帖で書の手ほどきを受けていたが、部活動の傍ら中学二年の十四歳になってからは、新幹線に一人で乗って京都の祖父のもとへ通って指導を受けるようになった。振り返ると「一番多感な時期に、五鳳先生のもとで学ばせて

もらえました。実際たくさん書を書きましたが、技術だけでなく、祖父の生きざまというか考え方や価値観を目の当たりにし、それが今の私の礎になっていると感じています」
こうして本格的に書の道を志した。中学校の時はそれほど厳しい指導ではなかった。「一番大切なことは用筆法でした。筆の持ち方やどういいう線がいいかを徹底的に教え込まれた感じはいたします。線が命だから、その線を生み出す筆の使い方、そこを徹底して言われたのが強く印象に残っています」。

大学は、東京学芸大学の書道科へ進んだ。大学生になってからの指導は厳しさを増し、卒業後、日展に出品するようになると、さらに厳しくなった。新幹線の中で泣きながら帰ったこともある。厳しく書き直しを言われ、指導の後、「今ちょっとやってみなさい」と、京都の祖父の家の二階の空き部屋で書かせてもらった。しかし、なかなかうまく書けない。一時間もしないうちに「書けたか」と言ったら祖父は階段を上がってくるのだった。でも焦れば焦るほどガタガタになってしまふ。「不甲斐ない私の作

品を見てがっかりしたような祖父の顔が今も忘れられません」。全然書けずに、結局、市川の自宅に戻って書き直し、また上洛するということが何度かあったという。

格別の存在である日展の重み

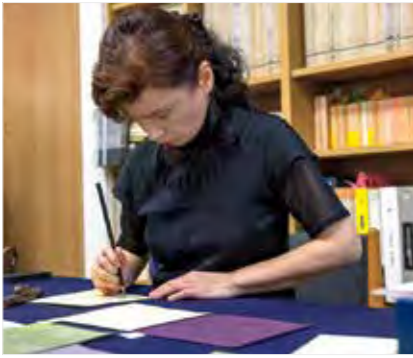
日展に出品し始めたのは、専攻科を修了した二十三歳からだ。ずっと指導を受けるために京都を往復していたが、時には通信で指導を受けたこともあった。「今思えば格別の計らいだっただと思います」。五鳳先生からの「だいぶよくなった。あとは



「柿の花」2016年 個展より

Profile TSUCHIHASHI YASUKO

1956年、千葉県生まれ。1979年、東京学芸大学書道科卒業。1980年、東京学芸大学専攻科(書道)修了。同年、第12回日展初入選。1992年、第24回日展「雪」により特選受賞。1998年、第30回日展「有されば」により特選受賞。2008年、第40回日展「良寛春秋」により日展会員賞受賞。2016年、改組新第3回日展出品作「墨染」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組新第4回日展出品作「かつしかの里」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本書芸院理事長。



細かいことは気にしすぎず、最後は気力。さらになんばりなさい」という添え書は今も大切に残している。

学びのなかで、祖父からの指導をできるだけ吸収しようと強く思った。「当時、たくさん話を聞いたことが、今になってお腹の奥の方にストーンと落ちることがよくあり、その偉大さが身に染みてわかるようになりました」。

日展との出会いを振り返れば、幼い頃から母に手を引かれて昔の都美術館の日展を見に行くのは習慣になっており、そうした空気を小さい頃から感じ取ってはいいた。現在、一年のうち二十を超える作品を書くが、土橋さんにとって日展は格別の存在である。

「日展というのは私を育ててくれた場所であるし、日展がなければこの世界の厳しさも深さも感じ取ることができなかったと思います。近頃は他の分野の先生とお話をさせていただく機会もでき、一気に芸術面での視野が広がりました。ありがたいことです」。

一つの作品を二百枚近くは書いていく。日展の場合は、いまだに肩に力が入る。「書き過ぎて新鮮な感動がなくなってしまうのですが、気になるところを直していくと、すぐに紙の束が減っていつの間にか減ります」。線や形はもちろん、構成や余白、墨の扱いや全体の風趣など、こだわりは沢山あるが、そのこだわりを見せずにまるで

五十四帖から一首ずつを選び五十四首を六曲の貼りませ屏風に仕立てて、母校の新校舎建替えに際し納めるというものである。生徒はもちろん教職員もほとんどが女性という母校にふさわしい作品として考え抜いて、平安朝の女流文学を選んだ。校長が同級生というご縁である。「母校への感謝と後輩へのエールを込めて書いています」。

一方、日展の作品を選ぶときは、作品そのものの芸術性を第一義に考えているという。「こういうものを表現したい」というイメージを具現化できる題材を選ぶ。激しいもの、静かなもの、パッション、わびさび、その方向性をその都度決めて選ぶ。秋の日展が始まると、すでに思いは翌年の作品に及んでいる。作品の反省も含めて、一年中考えを巡らせる。日展にかける気迫には並々ならぬものを感じられる。

基本は朝から日中に書く。「作品を作る

アドリブのようにかけた書がいまのところの目標という。「でも昨今は、以前五鳳先生が添え書きをしてくれた言葉に改めて思いを巡らしています。師は徹底した技術の習得の上の『形を超えた精神の世界』のこ



「墨染」2016年 改組新第3回日展 内閣総理大臣賞

とを示してくれたのではないか。言葉の重みをようやく今頃になって噛みしめています」。遙かな道である。

さて、これまでの日展出品で印象深かったことを語っていただいた。平成四年の特選である。五鳳先生が亡くなったのが昭和六十年、その後は日比野光鳳先生にお世話になった。当時、日展の会場の特選作品の前で、杉岡華郵先生に「あなたは五鳳先生が亡くなったらだめになると思ったがまあ頑張ってるな」と言われ、認めていただけだがとても嬉しく心に残っているという。その頃、第二子の出産の後だったが、「絶対にここで手は緩めない」という半ば意地だけで筆を持ち続けた。「周りの協力のおかげでもあります」と振り返る。とても印象深い特選受賞だった。また、内閣総理大臣賞に続き、芸術院賞を受賞し、「この世界を牽引していらっしゃる先生方のご苦勞を垣間見ることが増えまして、作家として良い作品を作ることが絶対条件ではあるけれど、この世界で生かしていただいているのは先生方あつてのことだと身に染みて思います。今後は書道の振興にも微力ですが尽力させていただきますことが恩返しになると考えています」。

母校に寄贈する六曲屏風を制作中

土橋さんが現在取り組んでいる作品のひとつに『源氏物語』がある。源氏物語の

うえで墨の美しさを大事にしています。夜間ではそれがわからないですね。夜はイメージ作りや素材をやり直したり、古典を学び直したり、何か栄養を吸収したりという時間にあてる。作品制作に至るまでの時間、そして筆を持った時の集中力はたいへんなものである。

漢字とかなの調和をテーマに

近年テーマにしているのは、漢字とかなの調和であるという。「私自身かな作家でありながら、どうやって漢字を勉強し作品に取り組んでいくかは若い頃から考えていました。大学では漢字を中心に勉強しました。この十年はそれを強く意識して古典を勉強し直しています」。

和室に掲げられている『和楽』という作品は、市川の実家にずっとかけてあった祖



「松虫」2021年 読売書法展

書の魅力は、二度と同じものが書けない一瞬の芸術であること。「基礎的な錬磨は圧倒的に必要になります。まずは師風を学び、基礎になる古典の勉強をもとにして、そこに精神性や人生観、時に偶然性とか全部が合体されて生まれる書が本当に難しくも面白いんです。二度と同じものが書けない。だから失うものも多い。でも何かを得るために、一枚、また一枚と書いて夢中になってしまおうのが書です」。奥深い書の世界の一端をお話しいただいた。

伊東正次

日本画家 — 日展会員



「老橋図」2007年 第44回日展

愛媛県と高知県の県境に位置する緑豊かな山間地域・久万高原町に生まれ育った日本画家・伊東正次さん。現在は東京で制作を続け、毎年日展で作品を発表する他、イタリアや中国、モンゴルといった海外での展覧会にも積極的に参加し、世界に日本画の魅力伝える活動も行っている。また美術館やギャラリースペースのみならず、古民家やホテル、寺社、公共スペースでも展示を行うなど、普段、あまり絵を鑑賞する機会のない人々に日本画を楽しんでもらえるような機会を提供することにも力を注いでいる。イタリア・ミラノでのグループ展を翌月に控え準備にいそしむ伊東さんを訪ね、これまでの歩みとこれからについて話をうかがった。

多摩美術大学で日本画を学び、その後、現代アートへと転身

もともと父親は日本画を描いており、県展にも出品されていたという。そのため、伊東さんにとって日本画は幼い頃から身近

なものだった。ただ幼い頃には喘息を患っていたこともあり、高校に入る前は医者になろうと思っていたこともあったそう。しかし絵の道も捨てきれずにいたところ、父親が美大進学のための予備校を探してきてくれて、最終的には美大への進学を決めた。

二浪の後に多摩美術大学日本画科に入學し、そこで日本画壇を代表する作家である加山又造氏そして米谷清和氏について本格的に日本画を学ぶことになった。

「電車の絵を描いて加山先生に見ていただいたことがあるのですが、先生がおっしゃったのは『パンタグラフがないね』ということだけでした。たしかにパンタグラフは描いていませんでしたが、なぜそんな瑣末なことを先生が指摘されたのか、当時はその言葉の意味するところがよくわかりませんでした。後になって、あの時の言葉は、リアルなように描いているけれど、本当は対象を見えていない、もっと観察をしないという意味だったのではないかと思いがたりました。

また、米谷先生は、学生の目線にまで下がって、同じ立ち位置で絵画の方向性を考

Profile ITO MASATSUGU

1962年愛媛県久万高原町生まれ。88年多摩美術大学大学院美術研究科修了。2004年臥龍桜日本画大賞展優秀賞。11年トリエンナーレ豊橋 星野真吾賞 審査員推奨。13年日展特選。14年日春展奨励賞。15年上海雲間美術館、新宿京王プラザホテル個展。16年名古屋陶磁器会館個展、日展特選。17年北川村「モネの庭」マルモッタン個展。19年日展審査員。20年近藤浩一路記念南部美術館個展。その他個展、グループ展多数。現在日展会員。

えてくれました。上からこうしろとか、そういう先生然としたところがなく、学生のやりたいことを常に応援してくれていました。もちろん、先生の立場という大局に立たれていたと思うのですが、それを学生には感じさせませんでした。僕と先生は十歳くらいしか離れていないので、『よねちゃん』と呼んでいましたが、先生が七十歳で退官されるまで、学生たちから『よねちゃん』と『ちゃん』づけで呼ばれた先生は、稀有な存在だと思います。学生時代や若い時に、米谷先生の言葉に励まされて今でも作家を続けているという作家が僕の周りにも多くいます」

日本画の第一線で活躍する教授陣の、絵に対する徹底した姿勢に、若くして触れることができたのは、伊東さんのその後の制作姿勢にも大きな意味をもったのではないだろうか。ただ伝統的な日本画と同時に、当時の多摩美術大学では現代アートの授業も若い学生たちに大きな刺激を与えるものだった。峯村敏明氏や東野芳明氏など現代アートをおもな批評領域とする批評家が教鞭をとっていたからだ。伊東さんも峯村教室に入り、現代アートに強く影響を受けることになった。「とにかく現代アートは格好良く見えたんですよね」と語る伊東さんは、大学院を修了すると、日本画を描くことをやめ、三年ほどインスタレーションやオブジェ制作に没頭した。



2021年 市川大門旧二葉屋酒造にて





「野仏園」2016年 改組新第3回日展 特選



2021年 市川大門旧二葉屋酒造にて

日展での作品発表と並行して、伊東さんの活動は美術館の枠をこえて広がっている。昨年には宝生能楽堂で能楽、邦楽、映像のコラボレーションが行われ、その舞台の背景である鏡板の前に、伊東さんの襖絵、屏風絵が設置された。また館内全体には伊東さんの樹木や花の作品画像が投影され、幻想的な雰囲気を作り出すといった演出もなされた。他にも廃業した酒蔵、旧二葉屋酒蔵の蔵での展示や、山中湖文学の森公園にある旧尋常高等小学校を復元した古民家での作品発表なども積極的に行っている。「古民家で展示しているのは主に襖絵が中心です。襖絵はタブローという西洋の



2021年 宝生能楽堂にて

そうした日本画とは離れた状態のなか、ある時、友人からグループ展に出品してみないかという誘いがきた。それが院展同人・伊藤彰耳氏と三人の若手作家による「たまたま3+1展」だった。「当時の作品は現代美術一辺倒だったので、なぜ私にお声がかかったのか不思議でした。伊藤先生はもとより、出品されている皆さんは日本画を描いておられるわけですから。自分としては日本画を描くつもりはなかったのですが、あえてインスタレーション作品でよければ参加しますとお返事しました。まさかそれではダメだろうと思っていたのですが、伊藤先生はそれでもよいとおっしゃったというのを聞いて、本当に驚きました。ちょうど現代アートの制作に行き詰まりを感じていた時でもあったので、それなら日本画の世界とけじめをつけるという意味でも、たまたま3+1展に出品する三年間は日本画を描いてみようと思ったわけです」。この展覧会には岩、仙人掌、桜をモチーフとした作品が出品されているが、特に最後の年に描いた桜は、どうやって描いたかあまり思い出すことができないほど、無我夢中で渾身の力を込めて描いたという。一つの展覧会への誘い、そこでの伊藤氏との出会いにより、伊東さんはあらためて日本画の魅力と可能性を感じ、再び日本画に挑むことになった。

再び日本画の世界へ挑む



「散華図」2021年 第8回日展

日本画へと戻ってからは、公募団体などには所属をせずに、主にコンクールや個展、グループ展などの場で作品を発表してきた。「無所属として活動を続けていたのですが、個展だと、どうも評価があいまいなところがあります。何らかのきちんとした評価をえたいと考えるようになって、それで日展に出品することにしました」。学生の頃は日展には三回ほど出品したというが、いずれも落選だった。それ以来、日展への挑戦はなかったが、四十四歳になってあらためて出品を決意したところ、初の入選となった。しかしその後は継続して入選が続くと

はいかず、数度の落選を経て、二〇一三年、一六年と特選を受賞。一九年には審査員を務め、二十一年に会員推挙となった。日展に出品を続けることについて「やはり個展などとは作品を見てくださる方の数が違います。十万人の方に作品を見ていただける機会は、やはり日展という場でしかかなわないものです。そして、地方の方と仕事をするにあたっては、日展所属という信頼感は大いものがあります。日本画の先生や先輩方からだけではなく、鑑賞してくださる方のさまざまなお評価をいただけるのが自分にとってはとても重要なことなんです」。

概念とは違って、ある一部を切り取って見せるのではなく、空間全体に絵の世界観が広がっていきます。そして襖一枚一枚はあがる意味独立していて、入れ替えることもできます。一種のインスタレーションといえると思いますし、まわりの自然環境と一体化していくものです。作品を見ていただくのと同時に、古民家そのものの雰囲気を感じたり、その地のおいしいものを食べたり、温泉に入ったたり、一般の方にも親しんでいただけるような場を作れたらいいなと思っています」。そのような環境全体に、そして多ジャンルにわたってのコラボレーションというものは、やはり一時期、現代アートの世界に触れ、インスタレーションという概念を取り入れたことが大きいといえるかもしれません。同時に、襖や屏風などは空間に存在してこそその意味をもつものであり、もともと日本画自体がもっていた資質を伊東さんは現代の新しい形として模索されているのかもしれない。

日本画から大和絵へ

伊東さんは今、現代において「日本画」から「大和絵」への回帰が重要ではないかと語る。「日本画」というジャンルはありますが、「アメリカ画」や「フランス画」という言葉はないですね。僕自身、いわゆる「日本画」を描いていますが、日本画家というよりも、日本人の画家という言葉

のほうがしっくりきます。岩絵の具を膠で定着させて描くのが日本画という定義であれば、膠ではなく樹脂を使うと日本画ではなくなってしまうのでしょうか。もう少し考えていくと、日本画という言葉は明治に生まれた言葉で、それほど古いものではありません。その時に日本画を指導したのが狩野派の絵師だったこともあり、江戸時代以前に描かれていた浮世絵や南画、水墨画といったものは、ある意味、日本画の概念からは排除されてしまったともいえます。当時は流入された西洋の文化やシステムに対抗するために必要な措置だったのかもしれませんが、長く培われてきた日本絵画の良い特質が失われてしまったともいえるのは残念なことです。

私が「大和絵」という言葉をあえて使うようになったのは、そこに古くから日本に根付く伝統的な絵画にアクセスすることができるとは思いませんかと考えたからです。あらためて日本の伝統的な絵画を見つめ直したいと思っています。「巨大な岩や桜、松の巨木、椿の老木、勇壮な富士山、そして山道にひっそりとたたずむ野仏など、伊東さんの描くモチーフからは長く積み重ねる時間の重みや、存在することの尊厳などが伝わってくる。日本画から再び「大和絵」へという思いで、古来の日本の伝統に深く身を重ね、そこから現代の日本の絵画を生み出していく。その作品は日本のみならず海外にも強く発信していくに違いない。

本山二郎



金沢駅から車で三十分ほど、小高い丘を登っていくと新興住宅地が広がっている。瀟洒な洋風のお宅が本山さんの自宅兼アトリエである。通じていただいた応接のなかには白を基調とした選り抜かれたオブジェや飾りなどセンス良く並び本棚にはさまざまな書籍がぎっしり並んでいる。すべてが選り抜かれた本山さんの世界なのだと感じた。アトリエの中には、作家が工夫して手作りした椅子のアームや、碗ちん棒、コルクでできた絵筆置き、そして機能的な収納庫。アトリエの設計にも工夫を凝らしたそ

うだ。

紆余曲折を経て油絵を選ぶまで

本山さんは奈良に生まれた。祖母が東京音楽学校で声楽を学んでいたが、ほかに芸術に進んだ人はいない。幼い頃から絵が好きでその方向に進みたい気持ちはあったが才能の世界というところで躊躇していたところ、中学三年のとき、担任の美術の先生から、美術を熱心に教えている先生がいる普

Profile MOTOYAMA JIRO

1971年、奈良県生まれ。96年、金沢美術工芸大学卒業 卒業制作大学買上。98年、金沢美術工芸大学大学院修了。2000年、第32回日展『ボラリスの輝き』により初入選。13年、第45回日展『ハミングバード』により特選受賞。16年、光風会展 損保ジャパン日本興亜美術財団賞受賞。17年、改組 新 第4回日展『萌芽の輝き』により特選受賞。光風会展T氏会員賞受賞。20年、石川県美術文化奨励賞受賞。現在、日展準会員、光風会評議員。



通科の高校を勧めていただきそちらに進学した。美術に進むことにはまだ不安があり、柔道部へ入った。最初の美術の授業は油絵で校内の風景を描くことがあり、その作品が先生に大変褒められ、ぜひ美術部へ来るよう熱心に勧められた。それでも踏み出せず、二年のコース選択ではモノづくりで携われるエンジニアを志望し、理系コースを選択してしまったのだ。しかし学ぶなかで、やっぱり絵をやりたいという気持ちが強くなっていった。美術の先生からは、大学進学にあたっては絵を描く力があれば国公立の大学に進学できると熱心に勧められ、柔道部の昇段試験の合格を機に、二年の一学期末に美術部に替わった。しかし、また壁にぶち当たる。後輩も上手な中、三十号の油絵がなかなかうまく描けなかった。その後、彫刻をやってみると「お前の彫刻は魅力がある」と言われ、今度は彫刻を目指すことになった。しかし、二年の学年末に美術の先生は勤務校を異動となり、三年になると一人で毎日学校に残っては木炭デッサンを描き続けた。そうした姿を見ていた教頭先生から「学校の鍵を閉めるのはお前にまかせるから好きな時間まで残ってよい」と応援され、毎日夜九時頃まで制作し、真っ暗な学校を施錠して帰るのが日課となった。作品が溜まるたびに、美術の先生の赴任先まで持っていった指導を受け、思いを高めていったという。高校三年では三つの美大を受けたが不合格。

その後、やはり彫刻ではなく油絵に戻ろうと決めた。水道端の美術学校の入試直前講座へ通ったとき、初めて彫刻をめざす人たちと共に学び、こぼれ落ちるほどの肉感と熱量を持った真つ黒なデッサンの横で、光と空間を求めた淡いグレーの自分の絵が並んだ時、非力に見えたが絵画を好む自分に気づき、浪人を機に油絵に転向したという。

金沢美術工芸大学で 模索した六年間

三浪して金沢美術工芸大学の油画へ進んだ。それまで膨大なデッサンを描いていた。受験雑誌に掲載されるなどその実力は確かなもので、入学後も一目置かれる存在

であった。大学一年二年のデッサンと四年の卒業制作はそれぞれ大学買い上げに選ばれた。「浪人を重ねていたので、自分なりのデッサンのやり方は正直、確立していたような思いは持っていたんです。ただ周りの現役入学の同級生は、最初はできていなくても途中からグッと伸びてきました」。それに対して自分はうまい絵とは言われても、「いい絵」とは言われない。受験に勝てる絵は描けるようになったが「自分は何を描くのか、どう向かえばいいのか」悩んだ。いろいろ模索を続け、作品合評会のたびに違うタイプの作品を出し「毎回違うべらでつまらない存在に思い落胆した。アントニオ・ロペスやワイエスの世界観が好きであった。しかし大学では独自の表現ス



「ハミングバード」2013年 第45回日展 特選 石川県立美術館所蔵



私たちの仕事というのはすごくありがたいことに作品が残るんです。だからやはり嘘があつてはいけないというか、悔いを残すような仕事があつた場合はそのまま残ってしまうと思います。省略して楽に描こうと思つたら結局、納得できない作品になつてしまうため、今もへとへとになるまで描いています。それで作品が残るならありがたいことだと思っています。

大作では人物を中心に小品は花も風景も描く。「自分が心動いたものを描き留めた」という思いが強くて、時間を絵の中



「萌芽の輝き」2017年 改組新第4回日展 特選



「ポラリスの輝き」2000年 第32回日展 初入選



タイムを見つめることに焦つた。現役で入学した彼らはやりたい思いと自分の技量をうまく育み二、三年で一つの形を見出していく一方、自分は技術が先に出てしまいいがうまく絡んでいかない。大学院の二年間も迷いの連続だったと振り返る。

高校教員になって、楽しんで描くことの大切さに気付く

卒業後は、金沢市内の遊学館高校の教員になった。早朝から夜九時まで、仕事に忙殺される日々を過ごすことになる。しかしなんとか絵を続けたいと思い、空いた時間を見つけては、身近な花を鉛筆で描くなど心動いたもののスケッチを繰り返した。わずかでもそれは楽しい時間だった。美術コースがある学校で、学生を連れて能登ま

でスケッチに一泊二日が出かけ、港で汐の匂いをかきながら船がやってくる様子を油絵で描いた。無事に戻り職員室で報告してその十号の絵を見せるとみな「いい絵だ」と褒めてくれた。「大学の時は風景を描くのは古い気がして自分なりにコンセプトチュアルに再構成しなくてはと考えていたが、普通に自分のデッサンの技量を生かして描いてみると自らが楽しくて、周りの人もいい絵だと認めてくれました。自分が楽しく描いてそれでいいんだと思えたんです」。

西房浩二先生との出会い

また、大きな出会いがあつた。勤め先の学校の向かい側に工業高校があり、そちらの美術教師に日展会員の西房浩二先生がいて、作品を見ていただく機会を得た。西房さんは高校でも精力的に風景画を描いていて、その大気を含んだグレーの空に憧れ、話を進めるなかで自分が踏み出す道の霧が晴れるような明快なアドバイスをその時々でいただいた。二十七歳のころだった。

「その後、光風会展に出していく中で、そこに所属する多くの良い作家が日展にも出品していることを知り、チャレンジしようと思ひました。二〇〇〇年からです。初入選の「ポラリスの輝き」は自分の中で思い入れがある作品で、左上隅に北極星（ポラリス）があります。不動の輝いている星ということ、モデルに彼女（現在は妻）

に凝縮して感動を封じ込めることができる。思いの凝縮のようなそうした絵を描きたいと思つています」。

金沢の伝統的な建造物を背景に透明層を重ねて描く

特選受賞作は、金沢市内の伝統的な建造物を探し、そちらに学生モデルをお願いして描いた。例えば変色した柱や傷跡があつてそこに人が住んでいた時間の蓄積があり、そのなかに、今輝いている学生がいる。自分の描きたい世界は、前向きな気持ちと不安で躊躇している思い、揺れ動きながら探しているような思いの表情や時間、いろいろなドラマがありその中の時間を永遠に閉じ込めたいという思いで描いている。

その場所を探していくが、何かが降りてくる瞬間があるという。たとえば醤油蔵を訪ねてハツとした。土壁に組まれた木が十字に交差し、その真ん中に窓から斜めに光がさして空中に舞う麹菌がキラキラ輝いていたのだ。完全に磔刑囚だと思ひ、ここにモデルに立ってもらい描いた。ちょうど東日本大震災の年だった。

特選の作品も、旧陸軍第九師団長官舎を取材することができた。また昨年は金沢の町や文化を伝える青壁と朱壁の町屋の中で描いた。金沢は文化財の宝庫である。背景になる建造物の意味を大切にしている。作品の特徴としては、茶と白で完全に

を描きました」。

初入選の報に、勤め先の校長をはじめ周囲はとても喜んでくれた。「石川県での日展への理解は、二年に一度の巡回展で慣れ親しみ、特別な思い入れを持っていただけることがあり、周りの方々がこちらの予想を超えて喜んで応援してくれました。自分はそのままで思いが至らなかった部分があり、日展をよく知らないまま出品したことをそのとき反省しました」。

夜を徹しての制作活動を続けて

高校教師をしながらの制作活動は容易ではない。夜九時まで学校の仕事をしてそのあと美術準備室で仮眠し深夜の十一時から三時頃まで描いて家に帰って二時間寝てシャワーを浴びて学校に来るといふ生活をずっと続けていたという。しかし、気分が乗って朝四時まで描いた日に寝坊で職員朝礼を遅刻してしまい、反省したものの一週間経たないうちにまた繰り返した。これは社会人としていけないと猛省し、自宅で朝型に制作するスタイルに変え、平日は朝三時に起き出して出勤する前まで描くやり方に替えたという。

その後十一年前に短大に異動になり、現在もそのスタイルで制作している。「仕事をしながら皆さん苦労して時間をつくり出し制作されているので、自分も頑張らなくてはという思いでやっています。ただ、自分で描きし、その上から透明層を何層もかけて、描き起こしていく。茶色の中にも青や赤やいろいろな色が透けて見えるのだ。手間としては二倍ほどかかるが、そこを大切にしており、油画の場合、物質として重層になると、光の当たり方や角度で見え方が変わる。そうした見え方が複雑になるようにしているという。

最初に絵が売れたのは大学二年のときで、夏休みの一時期、大学が市民を対象に実施するカルチャースクールで、一緒に描く美大生のデモンストレーター役に選ばれた。そこで描いた花の作品が歯医者さんに気に入られて購入された。数年後ご挨拶に行くと、入り口にかけてあり、とても喜んでいただいた。「この絵は娘に繋いでいくんです」と言われて、自分が描いた作品は、自らの手を離れると、鑑賞者と作品との間に世界や物語ができていくことを感じている。「だから作家は作品に描かせてもらって合わなくてはいけないと思ひ、そのことを心に刻み制作に臨んでいます」。

紆余曲折を経て、自らの油絵に対する思いを固め、金沢という土地に根ざしながら着実に良い絵を残していきたいという思いで制作活動をされている本山さん。自らが楽しいと思えることに取り組んだことで周りからも認めてもらえ、進んできたという体験は大きい。一枚一枚大切に作品に取り組み静かな確かな思いを感じた。

森田一成



富山駅からバスでまっすぐの道を四十分ほど南へ。住宅街を抜けると、遠くに山、青々とした田んぼが広がり小さな川が流れている。静かな住宅地に森田さんのアトリエがある。富山県小矢部市に生まれ育ち、ずっと剣道が続いていた森田さんは、高校の授業で、恩師を通じて彫刻と出会う。大学からは熊本へ。本格的に彫刻を学び九年を過ごし、故郷へ戻った。今は会社員をしながら制作を続けている。念願の夢は自分の手でアトリエを作ること。そのアトリエも五、六年かけて少しずつ改築を重ね、居心地の良い空間になっている。



森田さんは小矢部市に長男として生まれた。まだ一歳のころ、骨と骨の間に脂肪がついたことから手術を受けたことがあり、しばらく歩けないで過ごしたという。そこで両親は手で遊ぶおもちゃばかりを与えていた。そうしたことからか、手を使って遊ぶことは好きになったが、絵は苦手だったそう。小学校から剣道を始め、高校まで続けた。井波彫刻で有名な井波高校へ進学し、そこでなげなく選んだ選択芸術の工芸の授業で恩師との出会いがあった。日展作家の横山丈樹先生である。当時二十六歳くらいだったという。森田さんは、「つきあっている彼女に手作りのプレゼントをしたいんだ」と相談し、白い招き猫を作らせてもらった。高校一年のときのことだ。その彼女とは完成する前に別れてしまい、招き猫は今もアトリエの棚に鎮座している。この相談がきっかけで、横山先生と親しくなり、アトリエに遊びに行かせてもらうようになった。「当時から日展に出品されていて、作品を作っている姿を見ていたら面白そうで、自分も何か作りたいと相談

自らの手で改築した家とアトリエで制作を

会った。立川美術院の勝野先生だった。そして四月からこの大学の教授になられたのだ。自分の中で、忘れられない一言を言われた先生だった。「その時、バイトばかりしている姿を先生に見せたくない、心を入れ替えてまじめに勉強して、制作しようという気持ちになりました」。そこから、大学院、続いて博士課程へ進み、二十七歳まで在籍し、猛勉強をした。振り返っても作品制作しかしていなかったという。「一年間三六五日のうち三六〇日は大学に行っていました。展覧会の出品が迫ってくると、家にも帰らないで学校に泊まって作品を作っていました」。早く帰らないため、警備員ともよくケンカをしていたが、やがて仲良くなって「頑張ってるな」と言われるようになった。人生のある時期、無我夢中で頑張ったのである。

いよいよ就職を考える時期になり、親からは富山に戻らないかと言われた。富山に戻って就職することに決め、婦中にある企業に就職した。実家には戻らず一軒家を借りて新生活を始めたが、三年ほどして現在のアトリエ兼住居にしている物件を購入。以前から考えていた自分のアトリエを自分で作るという夢を実現させたかった。平屋でリフォームしやすく、現在、木型を作る仕事をしていることから、木工の知識もあり、自分でできると思ったという。

その後会社が吸収合併されて実家のそばの工場に異動することになった。そして電気関係の仕事をしていた父と不思議なことに同じ会社になった。家のリフォームの時

したんです」。高校二年のとき、「富山県の青少年美術展に出してみるか」と言われて、隣家のお姉さんをモデルに頭像を作り、みごと大賞を受賞した。

崇城大学で勝野眞言先生との再会

彫刻を大学で学びたいという気持ちがあるが、目に彫らんだ。しかし、美大受験必須科目のデッサンの勉強をしておらず、デッサン教室に通わせてもらったが、あまり好きにはなれなかった。それでも、「もうちょっと世の中を見てきた方がいい」というアドバイスから、東京の立川美術学院の夏期講習に参加。その講師で、日展作家の勝野眞言先生から一言「君のデッサンは単調だね」。今でも忘れられない言葉である。慣れない東京で森田さんは心がはずたくなって戻ったという。やがて美大を数校受験し、新設四年目の熊本・崇城大学へ入学することになった。学部長が日展の中心村晋也先生、教授に市村緑郎先生、楠元香代子先生がいらした。

一年生の頃は真面目だったが二年生のある日から親に仕送りをもらわず自分で生活しようと思ひ、バイトに明け暮れ大学の授業を疎かにしてしまっていた。この先どうしようかと思っていた三年生の終わり頃のある日、大学の廊下で見たことがある人と



「花水木」2018年 改組新第5回日展 特選

Profile MORITA KAZUNARI

1985年、1月5日富山県小矢部市生まれ。2001年、第26回富山県青少年美術展彫刻部門大賞受賞。03年、富山県立井波高等学校卒業。崇城大学芸術学部美術学科彫刻専攻入学(第4期生)。04年、第36回日展初入選(以降毎年出品)。07年、第62回富山県美術展彫刻部門大賞受賞。08年、第63回熊本県美術協会展大賞受賞。第63回富山県美術展彫刻部門大賞受賞、会員推挙。10年、ピエンナーレKUMAMOTO FINAL 準グランプリ受賞《大地～阿蘇～》。12年、崇城大学大学院芸術研究科博士後期課程芸術学専攻単位取得満期退学。13年、第43回日展日彫賞受賞。14年、第44回日展優秀賞受賞。16年、改組新第3回日展特選受賞。第46回日展日彫賞受賞。18年、改組新第5回日展特選受賞。20年、第37回とやま賞受賞(文化芸術部門)。



「どんぐり」2021年 第8回 日展



に電気周りを父親に依頼したことがきっかけで、親子関係も良くなったという。明るい光の差し込む自作のアトリエは、心地よい空間になっている。中央の台の上には、近作の娘の像が座ってこちらを見ていた。

不屈の精神と斬新な発想で

さて、初めて日展に出したのは十九歳のときだ。「とにかく日展に入選したい。横山先生が出されていたこともあり、横山先生が目標にしてみました」。初出品でみごと初選であった。当時、十代での入選は早かった。入選作品は女性の裸像であった。しかし、もう見たくないと大学院の二年のときに壊してしまったという。「初めて作った作品だから絶対とっておけ」と横山先生に言われていたが、自分は、この作品がここにあると成長できないのではないかと思ひ、ある日、無性に壊したくなって壊したのだという。

初入選のあとは入選を続け、博士課程の一年で一度落選した。落選作品を振り返ると、「制作ばかりしていたらいろいろ考え過ぎて、ちょっと抽象系の作品になったんです。だけど、作品をひっくり返したらかっこよくなるなと思って日展に出品しました」。型破りな発想である。「当時、もやもやしている時期で人体や女性像の制作に疑問があって、美とは何か、作品の美しさとは何かみたいな葛藤がありました。ス

品である。県展などにも積極的に出している。受賞を重ねた。
 大学院からの五年間、朝から深夜まで毎日作品作りで打ち込んだ日々の成果は着々と出ていた。二年連続で、中村晋也先生が選ぶ今年の一点に選ばれたこともある。
 大学院の修士制作は三メートルほどの大きな作品を作った。スケールはどんどん大きくなった。「大地の生命力」をテーマに芽が出る力強さなど、いろいろなことに結び付けて考えた。
 最近では、娘をモデルに実寸大で作品を作った。第八回の日展作品である。
 何を作るか発想が浮かばない時は、まず粘土をこねて、小さな形を作ってみる。シルエットだけ作って考える。
 今後の抱負は、「とにかく彫刻を続けてい

タイルのいい作品を作ればそれで美しい作品になるのか、では逆に太った人を作品にしたらどう見えるのかなみたいな。とんでもない大きな自分流の作品を作ったらどう見えるのか、いいと思ってくれる人がいるのか、と考えたことがあった」という。大学四年のときに、日展の会場で自分の作品をどれくらいの人が見て止まって見てくれるのかを後ろの方で一時間くらい見ていたことがある。皆、素通りだった。それがショックで、どうすれば自分の作品を見てもらえるのかを考えた。そこで、「美しさとは何か」をテーマに、太った人物像を出そうと思いついた。きっかけは、モデル無しで細い作品を作っていたときに、バラ



「明日の光」2016年 改組新第3回日展 特選

スが悪いので、もっと粘土をつけなければとどんどんつけて作っていったこと。自分の中で心地よい量と形で作品を作ったところ、意外に「いいよ、良かったよ」と言ってくれる人もいれば、「なんだこれは」と言う人もいた。何よりも自分の作品を見てくれたということがうれしかった。手ごたえを得て大学院二年のとき、もっと大きな作品を出した。「いいよ」と先生方に言っていた。その次の年にさらに大きな作品を出品して落選したのが博士課程の一年の時だった。
 教育実習では富山県に戻り、その間、富山県展に出品した「双」という作品が見事大賞を受賞した。出会いをテーマにした作

いくことが目標です。止めるのは簡単だけれど、続けていくのは、本当に家族の理解がないとできない。そういうのを全部理解してくれているからありがたいと思っています」。
 会社員として働きながらの制作は時間配分に苦労する。なかなかスタートが切れないという。平日の夜九時十時から一、二時間制作する。週末はなかなかできない。そこで、あるとき早く作る方法に気付いたという。それがスマホのカメラの画面を通して作品を作る方法である。「自分の目は勝手に補正して対象を見ているけれど、スマホの画面に映っているのは違うんです。それに気づいてから無駄に悩む時間が減り、制作時間が早くなりました」。スマホを見ながら、少しずつ作品を直して進めていく

のだ。
 しかし、粘土で作品を作るので、必ず型取りの時間が必要になる。一度、型取りの時間を逆算すると絶対間に合わないという作品があり、七十二時間寝ないで制作したこともあるという。
 こうして苦労の上でできた作品であるが、完成してみると、いつも満足がいけないという。「ちょっとくらい満足してみたいのですが。いつも展覧会場には、作品の間違い探しをしに行っているような感じですよ」。そうした気持ちがある作品への大きな原動力となっているのだろう。不屈の精神と柔軟な発想が次の新たな作品を生み出していく。今後どのような斬新な作品が生み出されるのか期待が膨らむ。

田中照一

金工作家 — 日展会員

東京・千駄木の駅を出て、五分ほど。昔からの住宅に混じって新たな家が入り並ぶなか、迷路のような細い小道を歩いていくと田中さんが家から出て、笑顔で迎えてくださった。上野近辺は、昔から金工関係のさまざまな職人が仕事をしている場所であった。戦後すぐに焼け野原となった荒川区から、戦災を逃れた谷中へ縁あって引越された。当時とは様子がずいぶん変わったというが、父親の代から銀器づくりを生業とする田中さんの仕事場を訪ねた。日中は鉄や銅を金づちで叩くカンカンカンカンとリズムカルな音が響く。田中さんにとっては赤ん坊のころからそれが子守歌のようなものであったそう。



父から受け継いだ金工作家の道
アメリカ・フリーア美術館やメトロポリタン美術館には、田中さんの代表的な作品である色金の飾り箱が所蔵されている。また中国では、田中さんが一枚板から作った端正な銀の急須など茶器が評判を呼んでいる。
田中さんの金工作家の道をたどるには、まず父親田中光輝さんの話を欠かすことはできない。千代田区神田で和ろうそくを作る家の次男として生まれた父、光輝さんは、子供の頃、近所で八代続く金工作家平田重光さんの所によく遊びに行っていたご縁で、そこに十五歳で修業に入り、技術を身に付けて十年後に独立した。日展作家の彫金の下地作りや町の仕事をしながら、戦後、四十歳くらいの時に日展に出品。三度ほど入選し、金属工芸作家として生活するようになった。田中さんが生まれたのは戦後すぐで、父は子守代わりにそばに寝かせて仕事をしていた。そばでずっとカンカンという音を聴いて育った。小学生になると、父の仕事を手伝った。職人の仕事を家族が手伝うのは普通のことだったという。母と自



「暁」2014年 改組新第1回日展

分と弟、そうして仕事を自然と覚えていった。
父が習った師匠の平田重光さんは銀器が専門の職人だったので父の仕事は鍛金が中心であったが、その後、銅や赤銅、銀と銅の合金である四分一などで作ってほしいという注文も受け、「色金」の仕事をするようになった。

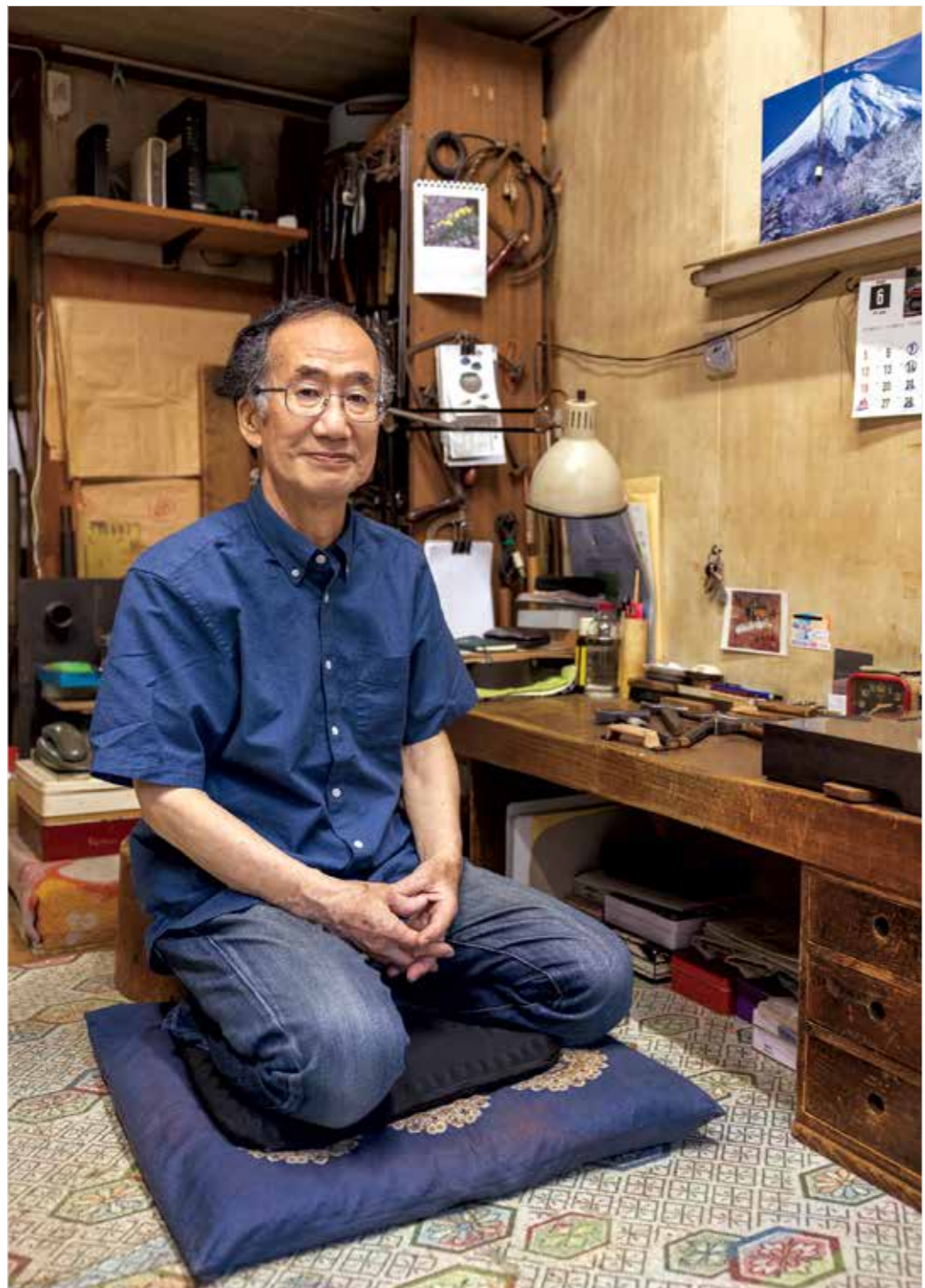
上野近辺には金属を加工する場所が何件もあった。金属の塊を溶解して板にする場

所、旋盤を回して形を作るところ、表面を研ぐところ、きれいに磨くパフを行うところ、メッキをする場所、こうした分業の職人が大勢いたという。父親はこうした職人と連携して仕事を進めていた。

さて、小学校時代から炭研ぎをしたりして手伝っていた田中さんは、そうしたことが好きで金工以外の道は考えなかったという。自然と、都立工芸高校へ進んだ。ここでは、鍛金と彫金と鑄金の金属工芸科の

コースがあったが鑄金を選んだ。一方、父親から学んだ銀器づくりでは、高校二年のときにはすでに自分の力だけで作品をつくり、それをお店で買っていただきアルバイト代にしていたという実力を持っていた。

高校卒業後は、一年ほど鑄物コースの助手として高校に残り、その後、家の仕事に入った。父は日展作家として活躍していたが、二十代の頃の田中さんは家の仕事をしながらも「のんびりしていて、好きな旅行やスキーも楽しんでいました」と振り返る。そうしてユースホステルの旅行で知り合った現夫人と二十五、六歳の時に結婚した。結婚後はどこか公募展に出そうと思いついた。伝統工芸と日展と迷ったが、弟が伝統工芸、その頃父も日展から伝統工芸に移っていたので、自分は自由でモダンな日展を選んだ。伝統工芸と技術的な素材や使い方は同じであるが、父から教わったことをベースに、それを作品としてどう表現するかが違ったという。



二十六歳のとき、初出品で初入選を決めた。「本当に嬉しかったです。初入選で、上野の宝ホテルの懇親会場で、皆様の前で挨拶したというのがとても印象に残っています。ああ、やっと認められたって感じがしました」。子供のころから父とよく日展に通っており、多くの人にかわいがってもらっていたのだ。「子供のころから大先輩の作品をずっと日展で見っていたのであの会場と一緒に並ぶのは一番の憧れでした。だ

Profile TANAKA TERUKAZU

1945年 東京都谷中生まれ。1964年 東京都立工芸高校金属工芸科卒業。1971年 日展初入選。1984年 光風会展文部大臣奨励賞。1985年 日展会友。明日をひらく日本新工芸展にて彫刻の森大賞受賞。1995年 日展特選受賞。2000年 田中照一・正幸(弟)金工展。日本橋三越本店(2006)。2004年 日本新工芸展内閣総理大臣賞受賞。2006年 日展特選受賞。2008年 日展委嘱出品 以降12年迄。2009年 田中照一金工展。日本橋三越本店。2012年 日展審査員(16年・21年)。2013年 日展会員。2018年 ワシントン・フリーア美術館、アーサー・M・サックラー美術館にて作品展示と講演会。2020年「Asia Week New York」出品。大西ギャラリー ニューヨーク。「工藝2020—自然と美のかたち—」出品。東京国立博物館。2021年「Japan : A History of Style」出品。メトロポリタン美術館。日本新工芸展文部科学大臣賞受賞。日展会員賞受賞。現在、日展会員。日本新工芸家連盟理事。金工作家協会会員



仕事場に案内してくださった。二重サツシの室内でトントン、カンカンという音を田中さんはどれだけ聞いてきただろうか。実際に鍛金の仕事を見せてくださった。狙ったところに当たると音の感覚や感触が変わり、音が全然違うという。また叩いた時の反動でもわかる。当金に当たる部分は一点。その確かな一点だけを狙っていくという。

仕事場は機能的に構成されている。長く座って仕事をする場所である。道具が取り出しやすく置かれている。この部屋には木台が三つ。一番古いのは父親の師匠から譲り受けたもので百年前のもの、「親父が使っていた台は五十年かな」。自分が独立するときにも台を作った。父と五歳年下の弟と三人で仕事をしてきた時期もある。

大きい当金は大きい作品用、小さいのはやかんや急須などを作る道具。さまざまなやすりなど、時代を経て受け継がれた道具が並ぶ。

火を使う場所には石が組まれていた。バーナーで素材に高熱を当てる。八〇〇度ほどだ。その後、水にひたす、焼きなましをして、次に当金の上で叩いて成形する。叩いた跡がそのまま残ったデザインを好む人もいるが、田中さんの作品づくりは丁寧に叩いていくのが信条である。仕上がった

あつたという。かつては職人が多い街で皆おらかな時代であった。現在では金工の人は音の問題で苦勞して郊外へ移る場合もあるという。

**色金の組み合わせを強みに
米国で作品紹介**

町の金工家が日展で活動することは少し難しいなと感じることがあると田中さんは語る。それはデザイン力がないためだという。しかし、自分の強みは、技術力の必要な色金の組み合わせをずっと続けてきたこと。赤銅と銅と四分の一の組み合わせに金を加える。微妙なバランスをとる、こうした異なる素材の組み合わせは非常に高度な技術であろう。叩き方ひとつで割れてしまうという。「それはもう経験ですからね」。

小さい作品は一枚板を叩いて作ることが多かったが、日展の大きなスペースに展示するためには大きな作品を作る必要があった。そこで、赤銅を溶接して形を作っていた。父親の時代は銀ろう付けで形を作ったが、つなぎ目に白い線が残り、その後のデザインに影響することもあった。田中さんは溶接をアルゴンガスにしており、継ぎ目がみえないのが特徴である。

田中さんの代表作は「飾り箱」である。金属で全部箱を作り、その箱の上に彫金を施す。それもみな、子供のころに接した先生方の影響が大きい。父親が、彫金の先生

作品は美しいカーブを描きなめらかである。そしてその上から繊細な彫金をたがねで行う。

大作は年に二点、春に新工芸展、秋には日展である。以前は光風会にも出していて三点作っており、そのほかに、銀器などを作るという忙しい日々であった。

手を抜かない徹底した仕事

今後の抱負を伺うと、「『飾り箱』シリーズでしばらく続けたいと思っています。個展ができるようになったので、いろいろな試しをしながら、小箱や昔からの銀器を作ってみたい。いろいろ作って田中照一のパリエーションをお見せしたいと思っています。公募展は年に一点なので、それだけで自分を見せるのは無理で、個展でいろいろな作品を見ていただければと思っています。ぐい飲みなどの酒器から大きな飾り箱まで。公募展の大きな作品は三分の一ほどで、ほかは、銀器を中心とした作品展示になるという。「やはり日展は大きな会場の中で競うわけですから、自分の得意なもので勝負して、存在感を示して、あとは個展で見てくださいね」。

作家として大切にされていることを尋ねると「今まで積み重ねてきた田中照一の名を汚さないような作品を作りたいというのが一番です。どんなに小さな作品も、自分の名前を入れますから手を抜かずにつくった



ものを見ていただきたいですね」。

五十年前に日展で初入選してから、ここまで来た。

「公募展はいろいろな考えがあつて、それに共鳴して参加するわけですから、学校でいろいろなデザインなど学んで新たな作品を作ろうと考えている場合は日展に向いていると思うんですが、技術から入っていくとどうしても普段の仕事に縛られてしまうというのがあります」。しかし、実際に田中さんのように父から教えを受け、一枚板から銀の急須をすべて作れる作家は減ってきているという。お茶の文化の国、中国ではこうした田中さんの茶道具が好まれていそうだ。現在は、工芸高校の先生に銀器の作り方を指導されている。

田中さんの卓越した技術力とデザインで生まれた飾り箱、そして一枚の銀の板から生まれていく端正な銀の急須類。海外でも絶賛される、日本の金工の美を追求し、軽快な金づちの音と共に、妥協を許さない田中さんの挑戦は続いている。



「M王妃の箱」1995年 第27回日展 特選



「明けの清流」2007年 第39回日展

からやっぱり初入選で挨拶するよう言われた時のことは忘れられませんね」。

その後、喜んで続けようと思いきや、落選してしまいました。そこで田中さんは、作品に伝統的な仕事の色が強すぎたと感じたという。他の勉強もしなくてはいけないと思い、油彩と工芸の両方を扱っている光風会に参加し、新しい技術を学んでいった。そうして五回目からはずっと入選を果たしている。

一九八五年には日本新工芸展で彫刻の森大賞を受賞。その賞金で初めてヨーロッパに行き、美術館で金工作品を見た。ヨーロッパはクラフトの仕事が中心で、看板や扉など鍛冶屋さんは多かった。「銀食器やジュエリーを作る人はいますが、日本のような工芸品を作っている人はいない。改めて日本の金工のすばらしさを感じました」。さまざまなことがらを吸収し、作品作りに励んだ。

「当時は、朝八時から夜十時まで座って金づちをもって叩いていました」。父の頃は夜を明かして叩いて、朝搬入することも



あつたという。かつては職人が多い街で皆おらかな時代であった。現在では金工の人は音の問題で苦勞して郊外へ移る場合もあるという。

**色金の組み合わせを強みに
米国で作品紹介**

町の金工家が日展で活動することは少し難しいなと感じることがあると田中さんは語る。それはデザイン力がないためだという。しかし、自分の強みは、技術力の必要な色金の組み合わせをずっと続けてきたこと。赤銅と銅と四分の一の組み合わせに金を加える。微妙なバランスをとる、こうした異なる素材の組み合わせは非常に高度な技術であろう。叩き方ひとつで割れてしまうという。「それはもう経験ですからね」。

小さい作品は一枚板を叩いて作ることが多かったが、日展の大きなスペースに展示するためには大きな作品を作る必要があった。そこで、赤銅を溶接して形を作っていた。父親の時代は銀ろう付けで形を作ったが、つなぎ目に白い線が残り、その後のデザインに影響することもあった。田中さんは溶接をアルゴンガスにしており、継ぎ目がみえないのが特徴である。

田中さんの代表作は「飾り箱」である。金属で全部箱を作り、その箱の上に彫金を施す。それもみな、子供のころに接した先生方の影響が大きい。父親が、彫金の先生

作品は美しいカーブを描きなめらかである。そしてその上から繊細な彫金をたがねで行う。

大作は年に二点、春に新工芸展、秋には日展である。以前は光風会にも出していて三点作っており、そのほかに、銀器などを作るという忙しい日々であった。

手を抜かない徹底した仕事

今後の抱負を伺うと、「『飾り箱』シリーズでしばらく続けたいと思っています。個展ができるようになったので、いろいろな試しをしながら、小箱や昔からの銀器を作ってみたい。いろいろ作って田中照一のパリエーションをお見せしたいと思っています。公募展は年に一点なので、それだけで自分を見せるのは無理で、個展でいろいろな作品を見ていただければと思っています。ぐい飲みなどの酒器から大きな飾り箱まで。公募展の大きな作品は三分の一ほどで、ほかは、銀器を中心とした作品展示になるという。「やはり日展は大きな会場の中で競うわけですから、自分の得意なもので勝負して、存在感を示して、あとは個展で見てくださいね」。

作家として大切にされていることを尋ねると「今まで積み重ねてきた田中照一の名を汚さないような作品を作りたいというのが一番です。どんなに小さな作品も、自分の名前を入れますから手を抜かずにつくった



の下地を作る仕事もしていた関係で、当時いろいろな仕事を見て学ぶことができた。そうしたことも生かされている。違う素材を合わせるのには難しい。叩いているうちに動くため、それを合わせていく高度な技術が必要である。現在、金属の箱を作っている人はほとんどいないという。技術はすべて伝統的なものであるが、その中で時代にあった造形やデザインを毎回出していく、こうしたことが自分には一番あつていたと振り返る。積み重ねが今日に繋がっているのだ。

こうして色金の飾り箱を作り続けていたところ、「米国ワシントンのスミソニアン、フリーア美術館に金工の好きな方がいて十年以上前からうちに訪ねていらして、この特別な、色を使った作品を作っていることに注目してくれました」。そのご縁で、田中さんはフリーア美術館で講演会やワークショップなども行った。現在はフリーア美術館をはじめメトロポリタン美術館にも作品が収蔵されているのである。

歳森芳樹

書家
— 日展会員

日常生活に欠かすことのできない文字。一枚の紙に墨と筆で書かれた文字が、絶妙に組み合わせ、全体から作者の豊かな思いや気魄のようなものが感じられる時、文字は一つの作品として多くの人々を魅了するものとなる。もともとシンブルでありながら、深い精神性をもつ書の世界で制作を続ける歳森芳樹さんに、これまでの歩みとこれからについて伺った。

スポーツの道を目指した少年時代

岡山県南部に位置する児島湾の干拓地に生まれ育った書家・歳森芳樹さん。県内最大規模を誇るビール麦（二条大麦）の畑は、現在、人気の観光地として知られている。周囲を畑や稲田に囲まれた自然豊かな土地で幼少期を過ごした歳森さん。教頭を勤めながら、書道教室で指導にもあたっていた祖父、そして父親も書をたしなむという家庭環境のもと、当然のように、歳森さん自身も小学生の頃には祖父の書道教室で習字の稽古をしていた。しかしその後、関心は

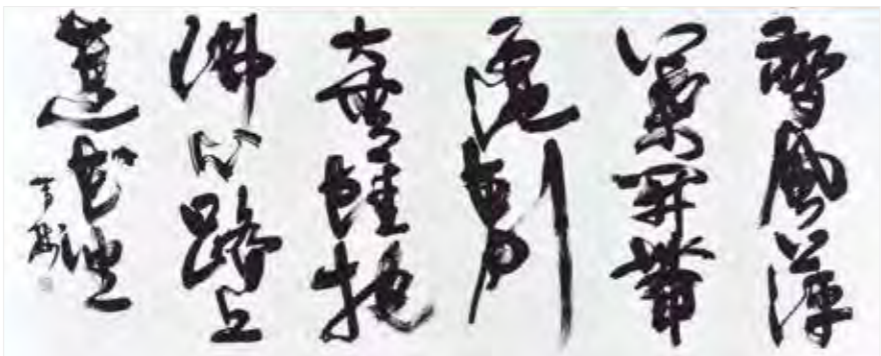
スポーツへと向かい、中学校ではテニス部、高校では陸上部に所属し、書道とは離れた学生生活を送った。「高校の頃は体育大学に進学しようと考えていました。陸上の短距離が専門だったのですが、同じ陸上部に日本一の記録を持つ同級生がいて、やはり才能の違いをまざまざと感じていました。それから腰を悪くしたこともあって、スポーツの道は諦めました。ただ東京の大学には行きたいと思っていて、父に相談したところ、大東文化大学を薦められました」。大東文化大学と言えば、数多くの書家を輩出した大学としても著名だが、歳森さん自身はそういったことは知らずに進学したそう。

本格的に書の世界へ

上京した際には、岡山の先輩から声をかけてもらい、書の勉強会後の食事会にだけ参加していた。そうしているうちに、せっかく来ていたのであれば、実際にやってみたらと言われ、そこで初めて本格的に書にふれ、書道用語などを学んでいった。「勉強会に参加するようになって一年くらい

経った時に、もう少し書を学んでみたいと思うようになり、一緒に勉強していた仲間とともに先輩について習いたいとお願したところ、習うなら先生を紹介しましょうと仰って、図録で先生方の作品を見せてくださいました。それで良いなと思ったのが成瀬映山先生の書でした。当時の成瀬先生は学生のお弟子さんをあまりとられていなかったのですが、ご紹介いただき習うことができました」。

本格的に学ぶことになった成瀬氏の教室は、とても厳かな雰囲気だったという。「お稽古にいらしている方々は、どなたも無駄なことは話されません。お教室は二階にあったのですが、一階の階段下におられた先輩弟子の方から、先生のところへ作品を持って行ってほしいと頼まれたこともありました。それほど先生は弟子たちにとっては怖い存在でした。皆さん、とても真剣に書に取り組んでおられて、そうしたお弟子さんたちの真摯な姿勢から、教えを受けるにあたっての心構えを覚えていただきました」。着実に書の道へと進んでいるように見えるが、当時は四年間の大学生活を終えた後には地元に戻って仕事に就こうと考



「袁枚詩」2017年 改組新 第4回 日展 特選



えていた。しかし教室に通い続けているうちに、だんだんと書に対する思いが変わっていった。「先生の字やそのお人柄に触れる機会が増えて、先生のもとももう少し書を学んでみたいと思うようになりました。書が好きでたまらないというよりも、先生の近くで学びたい、そのお人柄にこれからは触れさせていきたいという思いが強かったです。それで親にお願いして、三十歳まで先生のもとで学ばせていただくことにしました」。

日展への挑戦

引き続き書を学ぶ機会を得た歳森さんは、高校の書の非常勤講師をしながら、自身の書の勉強に励んだ。そして入門から一年ほど経って、謙慎書道展、当時は毎日書道展へと出品をするようになり、大学を卒業した年には、いよいよ日展への挑戦が始まった。「私が書を本格的に学び始めたのは大学一年の終わり頃からで、周りは皆さんもずっと長く学んでおられてすごく上手な方ばかりでした。まさか自分が日展に挑戦することになるとは思っていませんでした。大学を卒業した年の夏休み、ハガキが届き、成瀬先生が日展に出すための草稿を何日までに書いて持ってくるようにと仰っているとお書かれていました。それで夏休みどころの話ではなくなりました」。そうして突如始まった日展に出すための作品作り

Profile TOSHIMORI YOSHIKI

1958年岡山県生まれ。77年成瀬映山氏に師事。80年大東文化大学卒業。漢字の書法を臨書と創作の両面から研究し、今日的書表現を追求している。現在、日展会員、読売書法会常任理事、全日本書道連盟評議員、謙慎書道会常任理事。



一つの線にかける気魄

昨年には新審査員を務め、今年からは日展会員として活動を行っている。「日展に作品を発表することについて、以前、成瀬先生から『弁当を持って一日、自分の作品の前に行くとよい。一人でも作品に目をとめてくれたらいいものだ』とお聞きしたことがあります。それくらい多くの優れた作品が会場には並んでいるわけです。それは制作する自分たちにとっても重要で、なにかこれと思うもの、なにか目にとまったものを学んで帰ることはとても大切です。そして尊敬する先生方の作品を何年も継続して拝見していると、その作風がどんどん変化していることに気がきます。先生方は常にご自身の作品をより極められるために日々、研鑽されています。私たちが思いも付かないような作品を毎年、出品してくださるので、そういう作品に触れることができ、本当に勉強になりますし、楽しみです」。

多様な書物、言葉に触れ、それを日々蓄積し、一つの作品として昇華させていく。同じ文字を書いたとしても、そこに現れてくるのは作家本人の思想であり人となりだ。鑑賞者はそこに魅了され、深く共感する。「私にとって師匠の作品はとても大きな目標です。書はまず臨書と言って古典を習い、師匠や先達を真似、繰り返し学びます。それは単に字の形だけを真似ているわけでは

だが、ここで初めて歳森さんは漢字とかなとを調和させた現代的な調和体に向き合うことになる。「調和体にはこの時に初めて取り組んだのですが、なかなかイメージを定着させていくのが難しく、最初に持っていった題材も選び直すようにと何度か言われました。日頃の勉強が足りていないから、題材の選び方が下手、もっと普段からさまざまな書物を読んでいないとだめだと言われて、反省することばかりでした」。第十三回日展が最初のチャレンジで、その後も毎年出品してはいたが、入選にはいかなかった。そして第十七回展の時に、念願の初入選を果たした。「まさに震えるような気持ちでした。本当に自分でいいのかという気持ちもありました。成瀬先生の『書

の場合、一枚だけ書いても仕上がるかもしれないし、何百、何千枚と書く必要があるかもしれない。でも日本画も洋画も一年単位で一つの作品に取り組み、その成果としての作品を出品している。だから書も一年をかけてしっかりと作り上げていかなければならない」、「入選率は八パーセントくらいだった。そしてその中には読売書法展の審査員方の作品もある。そういった方々と同じ土俵で審査をされるわけだから、どれほど自分がやらないといけないかがわかるだろう。同じことをやっていると、その差ははっきり出る」という言葉が強く心に残っています。初入選を果たした作品は、真っ白な紙では上手くないところがあるが、しっかりとわかってしまうので、あえて模様のあ

る色紙を使うという試みをした。翌年は無事に入選するも、その後、十年ほど入選と落選を繰り返した。そうした時期を経て、毎年コンスタントに入選するようになり、二〇一五年、一七年に特選を受賞した。「成瀬先生がご存命の間に、特選の受賞が叶わなかったことは残念でなりません。せめて少しでも高みを目指しますという意思表示だけでもできていたらよかったです。が……。その思いを形に残るものにはできたら、先生への恩返しになるのではないかと、先生への恩返しに今も持ち続けています。自分にとって、成瀬先生の存在というのは、本当にかげがえのないものであり、その作品は変わらぬ目標です」。



「白樂天詩」2015年 改組新第2回日展 特選



「王文治詩」2021年 第8回日展

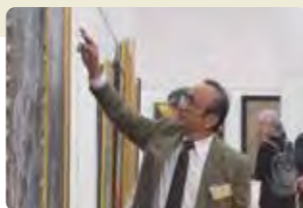
なく、そこに込められている『気』のようなものに触れて、書かれた先達はそれをいかに生み出してきたのか、何を考え、感じられ、どういったことをされていたのか、それを考えながら自分自身を成長させていくことです。成瀬先生は『紙面には舞台がある。その上に文字という役者をどう配置して演じさせたらよいのか。線の一本がだめなら、すべてがだめになる』と仰っていました。そうした一つの線にかける気魄のようなものに少しでも近づけたらと思っています」。



日展をより深くお楽しみいただくために、下記のイベントを開催いたします。

講演会・シンポジウム・映像による作品解説

5部門ごとに、日を分けて作家による講演会、シンポジウムと映像による作品解説を行います。



- ・場所：国立新美術館3階講堂（入場無料）
- ・定員：80名 ※各日講堂前にて30分前から整理券を配布いたします。

11月5日(土)	午後 1:30-3:30 [日本画]	○今年度受賞者（大臣賞・都知事賞・会員賞・特選）
11月12日(土)	午後 1:30-3:30 [洋画]	○今年度審査員と新入選者による座談会 大友義博 ○今年度審査員と新入選者による座談会 西房浩二
11月19日(土)	午後 1:30-3:30 [彫刻]	○座談会「作家が語る制作の舞台裏・アトリエと制作と作品と」 山田朝彦 石田陽介 田中厚好 寺山三佳 ○映像による作品解説「彫刻」 堀内秀雄 間島博徳 鈴木紹陶武 中原篤徳
11月23日(土)	午後 1:30-3:30 [工芸美術]	○シンポジウム「工芸とワザとデザイン」今年度審査員
11月26日(土)	午後 1:30-3:30 [書]	○シンポジウム「日展の書」 岡野楠亭 倉橋奇艸 西村東軒 福光幽石 吉田成美 ○作品解説「書」 植松龍祥 田中徹夫 和中簡堂 土橋靖子

*なお、今後の状況によっては変更が生じる可能性もございますので、最新の情報は公式サイトをご覧ください。

報道関係お問い合わせ

ご取材、写真申し込みなどは
右記までお願いいたします。

日展広報事務局 松井
TEL. 03-6312-4098 / 03-5786-4650 FAX. 03-6862-6727
MAIL sr@mbr.nifty.com
〒107-0062 東京都港区南青山2-18-20南青山コンパウンド502

わくわくワークショップ

◆5部門のワークショップ

小・中学生とその保護者を対象に、日展作家の指導のもと、各科のワークショップを行います。



実施日程	時間	部門(希望する部門を選択)
11月6日(日)	午前 10:30 ~	日本画 洋画 書
	午後 2:00 ~	彫刻 工芸美術(漆)
11月13日(日)	午前 10:30 ~	日本画 洋画 書
	午後 2:00 ~	彫刻 工芸美術(陶芸)
11月20日(日)	午前 10:30 ~	日本画 洋画 書
	午後 2:00 ~	彫刻 工芸美術(金工)

◎親子で記憶に残る体験をしてみませんか!
日展作家が直接指導します。

- ・対象：小・中学生とその保護者
(参加費は無料、保護者は入場券を各自ご用意ください。)
- ・場所：国立新美術館3階 講堂
- ・申込受付：ハガキか FAX、又はメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・学年・人数・希望日・希望部門(※第2希望まで)を明記のうえ、下記までお申し込みください。申し込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。(受付締切 10/28 必着)
- ・受付人数：各部門5組(10名程度)

「お申し込み・お問い合わせ」

110-0002 東京都台東区上野桜木 2-4-1 日展事務局・わくわくワークショップ係
TEL.03-3823-5701 FAX.03-3823-0453 E-mail event@nitten.or.jp

◆いつでも参加できる!「手紙を書こう!」

いつでも会場で参加していただけるイベントとして、「手紙を書こう!」を実施いたします。作品をみて発見したこと、不思議なこと、聞いてみたいことを「言葉」にしてみよう!

- ・参加資格：小・中・高校生
- ・参加方法：⇒日展会場で作品を見て、好きな作品を選ぶ。⇒「手紙を書こう!」コーナーで、その作品の作家に手紙を書く。(質問、感想なんでも OK!)

★日展会場の専用ポストに投函すれば、特製缶バッチプレゼント!※公式サイトでも受け付けます。
(缶バッチプレゼントは会場のみ)

★第9回日展では、新型コロナウイルスの感染拡大の予防措置として、以下のイベントを中止いたします。

●らくらく鑑賞会 ●ミニ解説会 ●「触れる鑑賞」プロジェクト 尚、今後の状況によっては変更が生じる可能性もございますので、最新の情報は、公式サイトで告知させていただきます。

作家から
返事が
届きます!

日展の特徴とみどころ

日展では、切磋琢磨された日本の現代作家の作品、しかも5部門のジャンルの新作 3,000 点が一堂に会します。エネルギーに満ちた会場で、新たな日本の美術との出会いをお楽しみいただけます。

日展は5部門がそろって、世界でも類をみない総合的な公募展

5つの部門〔日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書〕の作家が年に1度、日展のために制作した新作が揃う、世界でも類をみない総合的な公募展。

今年設立115年目の美術団体

明治40年から続く今年115年目の美術展。日本最大級の公募展で、歴史的にも、東山魁夷、藤島武二、朝倉文夫、板谷波山、青山杉雨など、多くの著名な作家を生み出してきました。

日本最大級の公募展

昨年の応募者数は11,173点で、入選者と無鑑査作品、合計3,037点の作品を展示しました。

日本の芸術家の渾身の最新作が集結

展示された作品は作家の今を写す鏡ともいえます。作品から世相や背景など多くのことを読み取る楽しさがあります。また、伝統的なスタイルの作品から現代的な作品まで、テーマもジャンルも幅広い作風をご覧ください。

文化勲章受章者の中村晋也（彫刻）、大樋年朗（陶芸）、今井政之（陶芸）、奥田小由女（人形）、文化功労者の日比野光鳳（書）、尾崎邑鵬（書）、井茂圭洞（書）、森野泰明（陶芸）などの作品も展示。日本の美術界を代表する作家たちの現在の作品をご覧ください。

全国の日展作家がバックアップし、鑑賞を深めるイベントを開催

鑑賞の理解を深めるイベントを開催。第9回日展では、各部門ごとの講演会、シンポジウム、作品解説を行うほか、日展作家から学ぶワークショップや作家に手紙を書くワークショップなどを開催いたします。詳細はP60-61をご覧ください。

日展について [参考資料]

公募展とは

これまで公募展が発展したのには、日本では作家は公募展に出て世に認められていくことが多く、団体の中で競い合い切磋琢磨することですぐれた芸術作品を生み出してきたという伝統があります。

日展は

日展は、日本に400ほどある公募展団体のなかでも最も大きく、毎年秋に「日本画」「洋画」「彫刻」「工芸美術」「書」の5部門と一緒に展覧会を行います。応募者のなかから、入選や特選が選ばれ、無鑑査出品の作品と並んで陳列されます。応募者は10代後半から100歳を超える方までさまざまです。会場に並ぶ作品点数は3,000を越えます。

1部門につき1人1点応募できる10月に搬入後、審査

毎年10月、指定の期日、場所に作品を搬入し、日展審査員が審査を行い、入選か否かが決定されます。昨年は11,173点の応募があり、2,366点が入選しており、全体では21パーセントが入選となりました。科ごとに見ると、日本画が351点のうち入選151点、洋画1,604点のうち入選が625点、彫刻88点のうち64点が入選、工芸美術612点のうち443点が入選、中でも書は8,518点のうち1,083点が入選で13パーセントと最も狭き門になっています。なお、昨年の新入選点数は全体で325点でした。

日展の5つの芸術ジャンル

- 〔日本画〕 日本の伝統的な絵画で、絹や紙に天然の鉱物を使った「岩絵の具」で描かれます。
- 〔洋画〕 キャンバス（布）に油絵の具で描く油彩画のほか、水彩画、版画があります。
- 〔彫刻〕 人や動物などの形を石や木を彫ったり（彫像）、粘土を固めたり（塑像）して作ります。
- 〔工芸美術〕 実用品に美しさや装飾性を加えて作られた作品で、陶磁器、漆、染色、彫金などさまざまな種類があります。
- 〔書〕 漢字、かな、調和体、石などに文字を彫り押し印する「篆刻」があります。

日展が輩出した芸術家たち

明治、大正、昭和、平成へと、こうした芸術家たちも日展で活躍し、近代日本美術の発展に寄与してきました。

- 〔日本画〕 中村岳陵、福田平八郎、杉山寧、東山魁夷、奥田元宋、佐藤太清、高山辰雄、大山忠作、鈴木竹柏
- 〔洋画〕 藤島武二、和田英作、白滝幾之助、棟方志功、小山敬三、井手宣通、國領経郎、伊藤清永、森田茂
- 〔彫刻〕 高村光雲、朝倉文夫、清水多嘉示、北村西望、澤田政廣、圓錐勝三、富永直樹、橋本堅太郎
- 〔工芸美術〕 板谷波山、山崎寛太郎、楠部彌弼、帖佐美行、高橋節郎、青木龍山、蓮田修吾郎、三谷吾一日比野五鳳、青山杉雨、金子鷗亭、村上三島、小林斗盞、杉岡華邨、高木聖鶴、小山やす子



日展とは

日展は、その前身である文展（文部省美術展覧会）の創設から今年115年目を迎える伝統ある美術団体です。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書と5つの部門からなり、世界でも類をみない総合美術展としてほぼ毎年開催され、全国の多くの美術ファンを集めています。その歴史をさかのばれば、江戸時代の長い鎖国の後、日本は産業の育成と同時に芸術文化のレベルアップの必要性を感じていました。文部大臣の牧野伸顕は、オーストリア大使時代より日本の美術の水準を高めたいという夢を抱いており、1906年に念願の公設展開催を決め、1907年に「文展」が開催されました。その後、文展は「帝展」「新文展」「日展」と名称を変えつつ日本の美術界の中核として、115年の歴史を刻んでいます。当初は日本画、洋画、彫

刻の三部門でしたが、1927年に工芸美術、1948年に書が加わり総合美術展となりました。1958年より民間団体として社団法人日展を設立。68年に改組が行われ、2012年からは公益社団法人となりました。

日展は、毎年10月に作品公募を行います。昨年日展の応募点数は11,173点で、そのうち入選は2,366点、日展会員の作品など671点を合わせ、計3,037点が展示されました。今年も、約3,000点の作品が3週間にわたり、六本木の国立新美術館で展示され、その後、京都、名古屋、神戸、富山と4会場を巡回する予定です。現代を生きる、日本の最高レベルの作家の新作3,000点が一堂に会す日展。熱気あふれる会場から日本の美のいまを体感ください。



報道関係お問い合わせ

ご取材、写真申し込みなどは
右記までお願いいたします。

日展広報事務局 松井
TEL. 03-6312-4098 / 03-5786-4650 FAX. 03-6862-6727
MAIL sr@mbr.nifty.com
〒107-0062 東京都港区南青山2-18-20南青山コンパウンド502

展覧会概要

日展は、明治40年の第1回文展より数えて、今年115年を迎えました。今年も11月4日（金）～11月27日（日）まで、国立新美術館にて第9回日展を開催いたします。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5部門にわたり、全国各地から応募された作品の入選者ならびに日展会員、準会員、前年度特選受賞者の作品約3000点が一堂に会し、幅広いジャンルの現代の芸術作品をご覧いただけます。東京展の後は、京都、名古屋、神戸、富山の4か所を巡回いたします。

展覧会名	第9回 日本美術展覧会	
英 文 名	The 9th NITTEN The Japan Fine Arts Exhibition	
会 期	2022年11月4日（金）～11月27日（日） 〔休館日〕火曜日 〔観覧時間〕午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）	
会 場	国立新美術館 東京都港区六本木7-22-2 東京メトロ千代田線乃木坂駅直結 都営大江戸線 六本木駅 7 出口徒歩約4分 東京メトロ日比谷線六本木駅4a 出口徒歩約5分	
主 催	公益社団法人日展	
後 援	文化庁／東京都	
入 場 料	一般	高・大学生

当日券	1,300円	800円
前売券・団体券（予約制）	1,100円	600円

（前売販売期間 10/1～11/3）

★お得なチケット★

○ペアチケット（前売りコンピューターチケットのみ）

1枚2,000円。お二人で入場の方、またはお一人で会期中2回入場いただく方に、お得なチケットです。他の割引との併用はできません。（販売期間は前売券と同じ）

○トワイライトチケット（時間限定入場券・会場窓口販売）

観覧時間：午後4時～午後6時

入場料：一般400円 / 高・大学生300円

・チケットやイベントなど最新の開催情報は「日展ウェブサイト」<https://nitten.or.jp/> でご確認下さい。

一 般
お問い合わせ 日展事務局 TEL. 03-3823-5701



巡 回 展（予定）

京 都	令和4年12月24日～令和5年1月20日	京都市京セラ美術館
名 古 屋	令和5年1月25日～令和5年2月12日	愛知県美術館ギャラリー
神 戸	令和5年2月18日～令和5年3月26日	神戸ゆかりの美術館 神戸ファッション美術館
富 山	令和5年4月21日～令和5年5月7日	富山県民会館美術館

